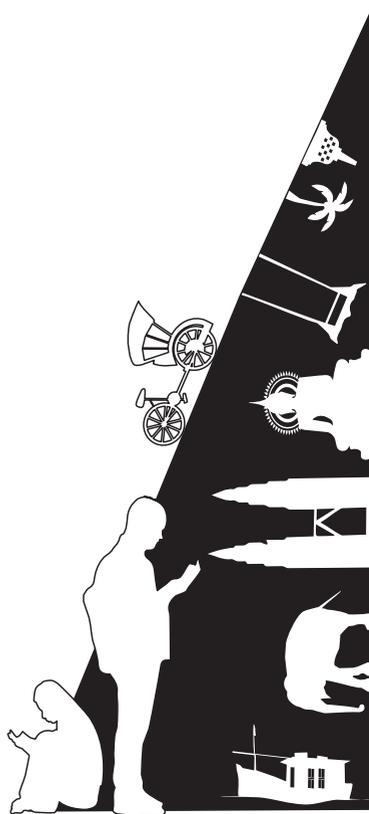


CSEASブックガイド

初学者のための 東南アジア研究

中西嘉宏・片岡 樹 編



京都大学東南アジア地域研究研究所

まえがき

このブックガイドはおじさん2人が編者をつとめている。そのうち1人(ちょっとおじさんの方)は東南アジアの政治の研究をしている。彼が大学生だった1990年代の後半あたり、東南アジア政治に関する教科書は『東南アジア政治学』(成文堂1999)くらいだった。他の分野でも、東南アジアに限定した教科書のようなものはわずかだった。ということはつまり、東南アジアを題材とする授業もまだ少なかったということである。

それから20年超。隔世の感がある。東南アジアと銘打った大学生向けの教科書が増え、東南アジアを含むアジア全般に関するものも合わせれば、Amazonで検索すると10冊くらいは見つかる。その中身は、各国別のものであれば、テーマごとに東南アジア諸国を横断して比較したもの、地域全体の国際関係や自然環境を検討したものもある。実に多様である。こうして教科書が増えた理由が、東南アジアを冠する授業が各地の大学で増えているからだとすれば、東南アジア研究が大学教育の中で定着してきた結果であろう。なかなかうれしい。

教室での授業だけでなく、大学などの海外研修で東南アジアの国々に学生たちが滞在する機会も増えている。編者のもう1人(もっとおじさんの方)は、アジアやアフリカの地域研究を専攻する5年一貫制の大学院の教員なのだが、最近の入学試験の面接では、タイ、フィリピン、ミャンマー、マレーシアなどでの研修や留学経験が志望動機になっている日本人受験生が目につく。東南アジアで育ち、現地語がペラペラの学生もいる。東南アジアの国々に滞在して、異なる社会を体験している日本人学生が増えていることは、私たち東南アジア研究者にとっては喜ぶべきことだ。

そこで、教科書で一通り学んだり、現地を経験したりして、もっと深く東南アジアのことを知りたいと思った学生さんに向けて作ったのが、この

ブックガイドである。初歩的な知識や体験からもう一つジャンプして、学問として東南アジアを学ぶための小さな跳躍台のようなものである。

各解題が対象とするのは、東南アジア研究では古典になっている本の中でも、日本語で書かれたものと、日本語訳があるものである。最新の研究成果ではないが、長い年月の風雪に耐え、現代になっても読む価値を認められている古典的な仕事である。のちの研究によって乗り越えられたものもあるが、研究史の中で知っていなければならない本ばかりで、読んで損をする作品は一つもない。

で、とりあえずの15冊。自然、歴史、政治、社会、経済といった視点から東南アジアをみられるように、各分野の古典を選んだ。すべての分野に精通することは無理だとしても、一通り知っておくと自分の専門とする分野の見方が変わるような本ばかりである。東南アジアで調査をしたり、東南アジアの事例を扱って論文を書こうとしている人にも役立つリストになっている。つまみ食いでも、全部食いでも、好きなようにこのガイドを利用してほしい。

実は、東南アジア研究の古典的な仕事の多くは英語で書かれていて、最近では、現地語の研究も目に見えて増えている。どちらも、ほとんど翻訳されていない。決して日本語の研究水準が低いというわけではないけれども、日本語で書かれているものや、日本語訳ばかりでは限界がある。それが実に残念。今後、第2弾、第3弾とシリーズが続けば、そうした本も紹介できるかもしれない。

最後にお礼を。まず、スポンサーに。このブックガイドは京都大学・東南アジア地域研究研究所の所長裁量経費の支援を受けて作成された。ご支援に感謝いたします。次に、執筆者の皆さんに。ご多忙にもかかわらず、快く執筆を承諾して下さった。心より御礼申し上げます。あと、協力者の皆さんに。このブックガイドは、京都大学アジア・アフリカ地域研究研

究科の読書会「東南アジア研究の古典を読む」と連動して作成された。受講生の皆さんの報告や討論は、本書をまとめるにあたって大変有益だった。そして最後は、プロジェクト・マネージャーに。弊所編集室の設楽成実さんが本書の企画から完成までさまざまなかたちで管理してくださった。ずばらで大雑把なおじさん編者には絶対にできない丁寧な仕事ぶりに感服です。テリマカシ、バニャック（本当にありがとう）！！

編者

※本書内表記についての補足

翻訳によって著者名の表記が異なる等の場合（ギアツとギアーツ、ウィニツチャクンとウィニツチャクーン等）は、あえて統一していない。

CONTENTS

自然・生態

- 中尾佐助 1966『栽培植物と農耕の起源』岩波書店（岩波新書）
小坂康之 2
- アルフレッド・R・ウォーレス 1993『マレー諸島—オランウータンと
極楽鳥の土地（上・下）』筑摩書房（ちくま学芸文庫） 古澤拓郎 8
- 鶴見良行 1982『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ』
岩波書店（岩波新書） 柳澤雅之 15

歴史

- トンチャイ・ウィニッチャクン 2003『地図がなかったタイ—国民国家
誕生の歴史』明石書店 小泉順子 23
- レイナルド・C・イレート 2005『キリスト受難詩と革命—1840～
1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局 芹澤隆道 30
- 弘末雅士 2004『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序』
岩波書店 山口元樹 36

政治

- クリフォード・ギアツ 1990『ヌガラ—19世紀バリの劇場国家』
みすず書房 西島 薫 44
- ベネディクト・アンダーソン 2005『比較の亡霊—ナショナリズム・
東南アジア・世界』作品社 岡本正明 51
- 土屋健治 1991『カルティニの風景』めこん 左右田直規 58

● 社会

ジェームズ・C・スコット 1999『モラル・エコノミー—東南アジア
の農民叛乱と生存維持』勁草書房 **下條尚志** 66

E・R・リーチ 1995『高地ビルマの政治体系』弘文堂 **片岡 樹** 74

石井米雄 1991『タイ仏教入門』めこん **小林 知** 80

● 経済

末廣昭 2000『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望』
名古屋大学出版会 **町北朋洋** 87

杉原薫 1996『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
小林篤史 94

速水佑次郎 2000『開発経済学—諸国民の貧困と富』創文社
(創文社現代経済学選書) **町北朋洋** 101

自然・生態

中尾佐助

『栽培植物と農耕の起源』

岩波書店（岩波新書），1966

文化としての農の営み

私たちは、主食であるコメの生産についてどれだけ知っているだろうか。アジアイネの水稻の種籾を播き、苗を育て、耕起して湛水して畔塗りした田に苗を移植し、施肥、除草、病虫害防除、中干しの作業を経て、収穫する。脱穀して乾燥した穀粒は、粳すりと精米により、白米になる。温暖湿潤なモンスーンアジアの農業は、雑草との戦いである。田んぼに水を溜めるのは、水稻の生育を促し、連作障害を防ぐとともに、雑草を抑制するためである。食料の生産から加工、流通、販売までのフードシステムが複雑化した現在、都市で生活していると、このような農の営みを目にする機会は少ない。しかしフードシステムが複雑化しても、機械化が進んでも、肥料や農薬の使用が増えても、水と光と養分により植物を育てる農の営みの本質は変わらない。

本書は、何千年も前から続く農の営みの本質をわかりやすく解説し、その奥に広がる農耕文化の世界へといざなってくれる。著者が強調するように、「文化」と訳される英語の「カルチャー」やドイツ語の「クルトゥール」という言葉の本来の意味は、「耕す」ことである。人々は昔から、毎日食べ続けて、原子力を利用する現代にまでやってきた。食べ物を生み出す農具や農業技術、収穫される農作物は、原始的どころか、人々が農耕段階に入ってから長い年月をかけて発達させてきた、かけがえのない文化財なのである。本書を読めば、農作物を現在味わえるのが奇跡のように感じられるだろう。

栽培植物の起源と世界の農耕文化

かつて人々は、森林や草原で野生動植物を狩猟採集することで食料を得ていた。そのうち効率よく食料を得るために、有用な野生植物を世話するようになった。野生植物は、熟した果実を植物体から切り離して種子を散布したり（脱粒性または脱落性）、予期せぬ環境変化に備えて種子の発芽時期をずらしたり（休眠性）、刺や有毒成分で動物から防衛したりする形質をもつ。しかし人々は、世話しやすいように、熟しても植物体に残る種子や、播いたらすぐに発芽する個体の種子を選んで播いた。また、刺や有毒成分が少ない個体や、利用部位が大きい個体の種子を選んで播き、邪魔な植物を除き、動物による食害から守った。長年にわたるこのような植物と人々の相互作用により、野生植物とは形質の異なる、人々の世話なしでは生育できない植物群が誕生した。これが栽培植物である。野生植物から栽培植物が生まれる過程は、栽培化またはドメスティケーションと呼ばれ、農学や人類学や考古学などの分野で、これまで多くの研究が行われてきた。

人々が栽培植物を育てるようになると、その品種群、栽培技術、加工技術、農地制度、農耕儀礼を含む、農耕文化複合が形成された。著者は農耕文化複合のうち、制度や儀礼祭祀などの要素を除いた「種から胃袋までの

過程」に着目して、「農耕文化基本複合」と呼んだ。そして世界には多くの異なる農耕文化複合がみられるが、「農耕文化基本複合」は下記の4系統しか存在しないと指摘した。

第一に、東南アジアで起源した「根栽農耕文化」である。東南アジアの熱帯多雨林の中で、バナナ、ヤムイモ、タロイモ、サトウキビの四つの栽培植物が開発された。デンプン質のイモ類が重要な特色なので、根栽（イモ栽培）という言葉が使われる。バナナは世界の果物の中でも非常に重要であり、最も品種改良が進んでいる。植物の1つの属で一番多くの種が食用にされるのは、ヤムイモを含むヤマノイモ属である。ヤムイモのマレー人の呼び名「ウビ」は、ヤムイモの伝播とともにマダガスカル島からハワイ島まで広がった。有毒なイモ類の加工法として、加熱してから流水中にさらす方法が開発された。このほかマレーシアからニューギニアにかけて分布するサゴヤシも重要である。1週間サゴデンプンの採集に従事すれば、1年分の食料が確保できる。パンノキは南太平洋の楽園を作る植物で、家の周りにパンノキが20本あれば一家が苦勞なく食べていくことができる。根栽農耕文化の特徴は、無種子農業であること、倍数体利用が進歩していること、マメ類と油料作物を欠くことである。

第二に、アフリカ起源の「サバンナ農耕文化」である。アフリカのサハラ砂漠以南のサバンナ地帯では、イモ類と異なり、貯蔵や輸送に便利な雑穀を栽培化することに成功した。この地域で栽培化された雑穀にはシコクビエ、モロコシ、トウジンビエ、テフ、フォニオなどがある。そのうえマメ類の栽培が加わった。マメ類はかたくて火が通りにくく、水で煮るための土器の発明以降に栽培化されたと考えられる。さらにヒョウタン、オクラ、スイカなど果菜類が副食として開発されると、根栽農耕文化の農作物と比べて、栄養バランスのよい食料が確保される。そしてゴマなどの油料種子を栽培して植物油を食料に加えると、農業のみで、ほとんど完全に栄養を補給することができる。サバンナ農耕文化は、シコクビエを基本要素

としてアフリカからアジアに伝播するとき、インドではアワとキビ、中国南部ではヒエが栽培化されるなど、独自の発展をとげた。ここで開発された栽培植物の特色は、そのすべてが夏作物であることだ。

第三に、地中海沿岸地域で起源した「地中海農耕文化」である。地中海気候は、冬に比較的温暖で雨が多く、夏に高温で乾燥する気候である。ムギ類はこの気候に適応した冬型一年生植物である。地中海農耕文化の作物の特徴は、一年生ということに加え、温帯では冬作物であることだ。ムギ類だけでなく、エンドウ、ソラマメ、ダイコン、キャベツ、ホウレンソウは、日本でも冬に栽培される。コムギとオオムギが野生から雑草になり、そして作物として栽培されるようになると、その畑の雑草の中からエンバクやライムギなどの穀類、ナタネやアマなどの油料植物が選び出されて栽培されるようになった。地中海気候のもとでムギ類を灌漑して栽培すると驚くほどの多収を達成する。このような灌漑ムギ作農業が、古代オリエントの文明成立の基盤となった。

第四に、アメリカ大陸で起源した「新大陸農耕文化」である。新大陸原産の栽培植物は、不思議なほど優れたものが多い。イモ類ではジャガイモ、サツマイモ、キャッサバは全世界で能力が発揮されている。有毒なジャガイモ類の加工法として、高地の寒冷な気候を利用した凍結と乾燥を繰り返す方法や、水晒し、発酵の技術が開発された。種子生産を行う農業では、サバンナ農耕文化と同様に、夏作物が栽培される。穀類ではトウモロコシがあり、今ではアフリカやインドの雑穀農業の主作物となった。マメ類ではインゲンマメがあり、欧米の夏作マメ類の主力となった。果菜類ではカボチャ、トマト、トウガラシなど世界の農業生産の標準的なものが生じた。油料作物にはヒマワリやラッカセイがある。

農の営みの将来

農の営みは時代とともに変化する。私たちの住む照葉樹林帯の事例を考

えてみよう。照葉樹林帯とは、西日本からネパール東部まで続く、シイやカシヤタブノキなどの常緑広葉樹（照葉樹）が優占する植生帯である。著者は、チャノキ、ウルシ、シソなど、照葉樹林帯に共通する植物資源利用を指摘したことで知られる。著者によると、照葉樹林帯では、東南アジア起源の「根栽農耕文化」を受容してから、アフリカ起源の「サバンナ農耕文化」の影響を受け、イモや雑穀を主食とする独自の農耕文化が発達した。そこに後からアジアイネが伝播したのである。なおアジアイネの栽培起源地は、本書執筆時点（1966年）では中国雲南省からインドのアッサム州にかけての地域だと推定されたが、現在では考古学の研究成果により長江中下流域と考えられている。

栽培化（ドメスティケーション）の考え方も時代とともに変化する。人々が野生植物から栽培植物を作り出した、という人間中心の理解はもう古い。現在では、植物と人の関係は対等である。つまり、人々は植物を栽培化して子孫を増やしてきたのと同様に、植物も人に栽培してもらうことで子孫を増やし繁栄してきたのである。むしろ、植物の栽培化は、現在進行形である。日本ではタラノキやワラビなどが栽培されるようになった。東南アジアでも多くの野生有用植物が野山から農地に移植され始めた。野生植物の栽培化は、人類史上大きな革命の一つであるにもかかわらず、その要因やプロセスはまだ完全には解明されていない。

私たちは、植物なしに生きることはできない。地球上で記録された約30万種の植物とどのような関係を築くのかは、私たちの将来を左右する問題であり、本書はそれを考えるための示唆を与えてくれるのである。

参考・関連文献

- 飯沼二郎. 1985. 『農業革命の研究—近代農学の成立と破綻』 農山漁村文化協会.
上山春平. 1969. 『照葉樹林文化—日本文化の深層』（中公新書）中央公論新社.
阪本寧男. 1988. 『雑穀のきた道—ユーラシア民族植物誌から』（NHK ブックス）日本放送出版協会.

渡部忠世（責任編集）. 1997. 『稲のアジア史 1 アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー』小学館（普及版）.

❖本書の著者紹介（中尾佐助）

大阪府立大学名誉教授，植物学者。アジア，アフリカ，オセアニアでフィールドワークを行い，栽培植物と農耕の起源説や，照葉樹林文化論など，独創的な成果を発表した。全6巻の『中尾佐助著作集』に収められた多くの論考は，今なお新鮮さが失われていない。

❖執筆者紹介（小坂康之）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科准教授。ラオスを中心とした地域で，自然環境の変容や農業の近代化について，植物を指標として調べている。学部生の頃に本書を読んで，植物と人の関係に興味を持った。

アルフレッド・R・ウォーレス

『マレー諸島』

——オランウータンと極楽鳥の土地（上・下）』

新妻昭夫（訳），筑摩書房（ちくま学芸文庫），1993

Alfred Russel Wallace. 1869. *The Malay Archipelago: The Land of the Orang-utan, and the Bird of Paradise*. London: Macmillan.

世界を変えた二つの偉業

アルフレッド・ラッセル・ウォーレス（Alfred Russel Wallace, 1823-1913）は、二つの偉業によって、世界を変えた研究者である。

一つ目の偉業は、生物学における自然選択説を提示したことである。自然選択説は、チャールズ・ロバート・ダーウィン（Charles Robert Darwin）が先に着想しつつも、その理論がキリスト教による創造説と相反することから発表を躊躇していたところ、若きウォーレスがやはり同じ発見に至ったため、急いで公表したというのが通説である。

ヒトを含むあらゆる生物は、主が創造した不変物ではなく、それぞれ変化してきたものであり、その変化の要因は突然変異と自然による淘汰、すなわち自然選択であるとする説である。この説は、その後「進化論」あるいはダーウィン進化論として生命理解の基本理論となり、その影響は生

物学にとどまらず、農学、医学、社会科学、そして社会のあり方そのものにも影響をもたらした。この説は2人による共同発表となったが、ダーウィンとその著書『種の起源』の方が知られているかもしれない。しかしウォーレスなくしては、この説が日の目を見ることはなかっただろう。

二つ目の偉業は、本書のテーマである生物地理学という新学問分野を確立したことであり、後に「ウォーレス線」や「ウォーレスシア」と呼ばれるものを発見したことである。8年にも及ぶ困難なフィールドワークで、命の危険を冒しながらも、生物標本を集め続け、広範な生物の分類を地道に行った結果、彼がみつけた目に見えない境界線が、生物学、生態学、地理学に多大なる影響を及ぼした。そして、それは地球上の大陸や島の成り立ちについても示唆を持つものであった。

原著は、ウォーレスがそれまでに学会発表や論文として公表した結果に、膨大な探検記録を書き足して、1869年に出版されたものである。ダーウィンの『ビーグル号航海記』や、ヘンリー・ウォルター・ベイツ (Henry Walter Bates) による『アマゾン河の博物学者』と並んで賞される、博物学者による探検書である。

ウォーレス線

東南アジアの地図をご覧ください。ユーラシア大陸のマレー半島の先端の、すぐ南にインドネシア領のスマトラ島がある。そのすぐ東にはジャワ島が、その東には観光地として知られるバリ島があり、さらにその東にはロンボク島があり、小スンダ列島が続く。また、マレー半島から東、ジャワ島から北にはボルネオ島(カリマンタン島)があり、その東にはKの形をしたスラウェシ島がある。ここより東にはモルッカ諸島など、小さな島々があり、つづいて世界で2番目に大きな島であるニューギニア島がある。そして南にはオーストラリア大陸がある。

二つの大陸に挟まれた、これらの島々は当然ながら、互いに海によって

隔てられている。ウォーレスは島々に生息する動物や昆虫をひたすら採集し、その形態を観察して、種の同定を行い、新種を見つけてはそれが既知のどの種と同じグループなのかを分類した。同定したり分類したりするのは、現代の子どもが昆虫を取ってきて、虫眼鏡で調べながら、昆虫図鑑で名前を調べるようなことであるが、専門的な分類ははるかに高度で困難なものである。過去の生物学の論文に記載された、細かな特徴の違いを検討しなければならないし、そのためには良い標本を採る技術と、膨大な生物学知識が必要になる。ウォーレスがこれほど多種多様な生物を分類・同定できたのは、他の研究者の支援を得たところもあるが、彼自身の博覧強記には驚かされる。

この結果、ウォーレスはユーラシア大陸から近いスマトラ島、ジャワ島、バリ島、ボルネオ島には、マレー半島からインド近辺と共通する生物が棲息しているが、そこより離れた島にはまったく異なる生物が生息していることを見出した。地図上でバリ島とロンボク島はごく近くにあり、実際の距離はわずか50kmほどである。しかし、ロンボク島では、陸上哺乳類が劇的に少なく、鳥類や昆虫類はいてもバリ島以西にいるものとは大きく異なる。スラウェシ島に棲息するバビルサは、イノシシ科の生物であるが、世界の他のどこにもいない属である。

本書においてウォーレスは、かつてスマトラ島、ジャワ島、バリ島、ボルネオ島などはユーラシア大陸と繋がっていたという仮説を着想した。ロンボク島はその昔でも海で隔てられており、大陸の動物が渡れなかったという。また、かつて大災害によって大陸にいたブタ（イノシシ）が海に流され、少数が運よくスラウェシ島にたどり着き（偶発的な移動）、そこで自然選択により独自進化を遂げたのがバビルサであるという。このようにして、かつて陸続きであったかどうかで、動物相が変わる境界線があると結論づけた。この分布境界線がウォーレス線である。こうして東南アジア島嶼部において、ウォーレス線より西は東洋区、東はオーストラリア区とい

う生物地理区が見出され、生物地理学の始まりとなった。なお本書（日本語訳）上巻の318ページに、ウォーレス線という単語が出ているが、英語の原文にはなく、ウォーレス自身がそのように名づけたわけではない。

島が大陸と繋がっていたという陸続き説は、当時すでにイギリス科学界でも考えられていた。ウォーレスはその説明として、地殻が沈降したと考えていたようであり、旅行中に経験した火山活動や地震についても記録を残している。しかし、今の科学ではプレートテクトニクスと、最終氷期後の海面上昇によって説明される。まず2億年前に地球上にたった一つであった大陸は、地殻がいくつかの方向に毎年数cmずつ移動することで分裂し、やがて今のような大陸配置に至った。そのため、ユーラシア大陸とオーストラリア大陸には、それぞれ全く異なる動物がいるのである。また、約1万年前までの最終氷期には、海面は今よりも100m以上低かったため、ウォーレスが考えたとおり、いくつかの島はどちらかの大陸と繋がっていたのである。ただし、ウォーレス線より東で、モルッカ諸島やティモール島あたりまでの島々は、どちらの大陸にも繋がったことがない。この島々は固有生物の多さで知られており、生物地理学では「ウォーレシア」と呼ばれている。

学際型フィールドワーカー

本書では、ウォーレスの探検と当時のインドネシアが生き生きと描かれる。今では「蝶の谷」と呼ばれるバンティムルン渓谷を訪れた彼は、その光景を「色鮮やかなチョウ—橙、黄、白、青、そして緑—の集団が点々と集まって見事な光景を見せ、驚かせると数百頭が飛び立ってさまざまに彩られた雲のように群れ飛んだ」（上巻p.368）と表現している。また、昆虫を採るためには、独自のトラップを開発するべく創意工夫する様子も興味深い（上巻p.154）。

ウォーレスは12万5000点以上の標本を集めたが、多くの時間を地元の

人々に入り込んで過ごし、文化、言語、人々の身体的特徴についても詳細な記録を残した。

彼は民族の違いについても、生物地理区との関係で考察を試みた。その考察は、今からみれば必ずしも正確ではなかったが、ヒトについても「自然条件と自然選択の継続的な影響」（下巻 p.435）を見出しているのは、人類遺伝学の萌芽といえるであろう。今でいう学際型フィールドワーカーである。

とはいえ、現代のフィールドワーカーがこの本を読むと、倫理上看過できないところもある。本書の副題にあるように、ウォーレスの探検の目的は、まだあまりヨーロッパに標本がなく、研究が手薄であったオランウータンとゴクラクチョウの標本を集めることにあった。しかし、より良い標本を求めて、オランウータンを見つけては次々と撃ち殺す様子には、いささか胸の痛みを感じる。

ただし、本書を通じてウォーレスは、しばしば資源乱獲や、ヨーロッパによる植民地経営の問題に触れ、ヨーロッパの文明に対して批判的な観点を示しており、当時としては先進的でもあった。

生物学者による地域研究

本書は注釈や記録も含めると上巻 572 頁、下巻 580 頁の大著であるが、これを翻訳したのは新妻昭夫である。新妻は熱帯の動植物名の一つ一つに、当時と現代の学名と和名を当てはめ、そして生物学、地理学などからみて適切でありながら、探検の臨場感を失わせることなく、見事に訳した。本書の下巻には新妻による「解題」が書かれており、ウォーレスの生涯や当時のイギリス科学界、そして本書が出版された経緯まで、実によく説明がされている。生物学者でありフィールドワーカーである新妻だからこそ、できた仕事であろう。

再びウォーレスに戻るが、非専門家が自然をみて、誤った理屈を、勝手

に述べることを批判して、「第一に自然のごく一部をみただけで一般化した結論を引き出しはならないということ、第二に樹木や果実は、動物界のさまざまな産物も同じことだが、人間の必要や便宜のためだけにできているわけではないらしいということである」（上巻 p.139）と述べている。生物学の高い能力と、長いフィールドワーク経験に裏打ちされたウォーレスの言葉には重みがある。

日本の、とくに京都大学を中心とする地域研究は、決して人文・社会科学だけでなく、自然科学を含む学際性に誇りを持ってきた。しかし、最近では生物学、とくに生物分類学による地域研究の勢いが衰えているように感じることもある。そもそも分類学自体が、日本では予算面や人事面でどんどんと後退させられているという話をきく。

本書を読むことは、古き良き博物学とフィールドワークへのノスタルジーを想起するだけでなく、これからの自然科学による地域研究をどう進めればよいかという難題を惹起させる。まずは、若い研究者が本書を読み、このような地域研究があることと、その魅力について知ってもらいたいと願う。

参考・関連文献

- チャールズ・ダーウィン．島地威雄（訳）．1959-1961．『ビーグル号航海記（上・中・下）』（岩波文庫）岩波書店．
- ヘンリー・ウォルター・ベイツ．長沢純夫・大曾根静香（訳）．2002．『アマゾン河の博物学者』新思索社（普及版）．
- 京都大学東南アジア研究センター（編）．1997．『事典東南アジア—風土・生態・環境』弘文堂．
- 山本信人（監修）．井上真（編著）．2017．『東南アジア地域研究入門1 環境』慶應義塾大学出版会．

❖キーワード解説

【**ヘンリー・ウォルター・ベイツ**】ウォーレスと同世代の博物学者。ウォーレスに誘われてアマゾン探検に出かけたベイツは、ウォーレスが先に帰国したあとも滞在し、11年に及ぶ調査を行った。ウォーレスの標本が事故によりすべて失われてしまったことと対照的に、ベイツはここで1万4000種以上の標本を集めた。彼は、本来は無害な種が、捕食者に食べられるのを逃れるために、有害な種に自らを似せるという擬態（ベイツ型擬態）を発表し、このことを根拠の一つとして、ダーウィンやウォーレスの自然選択説を支持した。

【**新妻昭夫**】生態学者・動物学者の文筆家・翻訳家であり、恵泉女学園大学教授などを務めた。ダーウィンやウォーレス、彼らを巡る当時のイギリス科学界についての研究も行った。主要著書に『種の起原をもとめて』（ちくま学芸文庫、2001年）ほか、翻訳書多数。本書の翻訳にあたり新妻自身も、鶴見良行に誘われてインドネシア航海をしている。

❖本書の著者紹介（アルフレッド・R・ウォーレス）

イギリスの博物学者・探検家。現在のインドネシアとマレーシアに及ぶ島々で長期間・広範囲の調査を行い、生物区を分ける境界線としてのウォーレス線を見出した。また自然選択の進化論を発表した1人である。それまでの多くの博物学者が国家プロジェクトとして各地に派遣されたのとは異なり、ウォーレスは自らイギリスの王立地理協会に支援を申請して渡航し、さらに自身が集めた標本を売った資金で探検と調査を継続した。

❖執筆者紹介（古澤拓郎）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、専門は東南アジア・オセアニア地域研究／人類生態学。感銘を受けた本や論文に、マーク・プロトキン、屋代通子（訳）、1999、『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話（上・下）』築地書館、T・C・ホイットモア、熊崎実・小林繁男（監訳）、1993、『「熱帯雨林」総論』築地書館、Scott Atran et al. 1999. *Folk ecology and Commons Management in the Maya Lowlands. Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA.* 96 (13) : 7598-7603.

鶴見良行

『バナナと日本人』

——フィリピン農園と食卓のあいだ』

岩波書店（岩波新書），1982

グローバル化が進行した1990年代以降、従来の地域研究のようなローカルな視点を持つ研究と、地球的課題（グローバルイシュー）の影響を扱うようなグローバルな視点を持つ研究のいずれもが影響を受け、ローカルとグローバルの双方の視点を取り入れた研究が進むようになってきた。本書は90年代以降のグローバル化の時代に書かれた作品ではないが、ローカルとグローバルを繋ぐ研究の嚆矢として、著者鶴見の視点や研究手法は今なお古くないばかりか、むしろますます必要とされているように思える。

教育者としての鶴見

鶴見が龍谷大学の教員になり学生を本格的に指導する立場になるのは60歳を越えてからである。それまでは、市民と勉強会や共同研究を実施し、市民運動に参加しながら、自ら歩いて考え、「歴史ルポルタージュ」

と呼ばれた手法で多彩な活動を行ってきた。

一般のそうしたイメージとは異なり、鶴見はアカデミックな作法や教育も大変重視していたと思われる。実際に大学で鶴見から教えを受けた赤嶺綾子は、鶴見と学生たちのさまざまな場面を生き生きと切り取っている(赤嶺綾子 2006)。曰く、若いころカメラマンを目指したことがあるという鶴見の話と、それを聞いて、変わった生き方があるものだ話す学生。現場に散りばめられている学問テーマの存在を学生たちに気づかせたくて仕方なかった鶴見。たくさんの個人的な質問をして学生各人の研究テーマを探すヒントを与えようとしていた鶴見。経済学部のゼミにもかかわらず現場に徹する学問の本ばかり紹介する鶴見と、現場で起きていることが世界経済の一端を示していることに気がついた学生たち。修士論文のテーマをようやく見つけることのできた学生の発表を聞いて、躍り上がるように喜んだ鶴見。アカデミズムと一定の距離を置きながらも学術論文という形式を意識して指導していた鶴見。そうした鶴見の姿勢に呼応するように、ゼミの枠を越えて学生同士が論文を書く作法を教えあったり、夜中まで互いの研究テーマについて議論したりする環境ができていたこと。これらは、鶴見が教育をいかに大切だと考えていたかを示すものであろう。

バナナを通じて日本と東南アジアの関係を問う

本書は、バナナを題材に、フィリピン・ミンダナオ島の栽培の現場から日本での消費にいたるまでの過程を追いかけて、国際的な経済構造の中で日本と東南アジアがいかに繋がっているのかを明らかにした作品である。

第1章では、本書の主題と目的が語られる。フィリピンだけでなく東南アジアのどこに行ってもバナナはよく見かける果物のひとつである。しかし、フィリピンで生産され日本に入ってくるキャベンディッシュ種は、アメリカ資本により導入され、新しく日本向けに栽培されるようになった換金作物である。現地の人々は、自分たちが食べない作物を栽培しているの

である。しかも、現地のバナナ農園を支配する4社のうち3社はアメリカ資本であり、最大の恩恵を受けているのはアメリカ企業の株主たちである。バナナという日本人にとってなじみ深いモノを見ることによって、日本と東南アジア、広くいえばアジア・アフリカ諸国との関係が、私たち1人ひとりに直接結びついた問題としてリアルに見えないだろうか、というのが鶴見の問題提起である。

第2章と第3章では、フィリピンやミンダナオ島の歴史を踏まえ、戦前期にミンダナオ島に発達した外国資本による植民地農業の歴史的経緯が述べられる。それは、植民地政府が現地住民の土地を収奪したというような単純な図式ではない。それに加えて、戦前の日本人による麻農園の経営と対比しながら、フィリピンの土地制度や小作制度と関連した労働や技術の問題が検討される。

第4章と第5章では、多国籍企業の巧緻な土地取得や取引の形態、企業にとって有利な——栽培者にとっては市場原理が働かないような契約方法、国際的取引等、経済的な側面が、数値データを示しながら説明される。

第6章では、土地もお金も自由も、そして文化さえも奪われたバナナ栽培農家の悲惨さが、抑制された文章で説明される。その様子が感情的に記述されるのではなく、大きな歴史的経緯や社会経済構造の中で整合的に説明されるため、バナナ栽培農家の逃れることのできない悲惨さが読者にずっしりと伝わる。

第7章では、バナナ産業がフィリピン経済にとってどのような意味を持つかが議論される。この中で鶴見は、文明の進歩を、識字率の高さや死亡率の低さなどで測ることをやめ、「自分たちの生きたいように生きる、自分たちの選びたいように暮らし方を選ぶ」という目標の実現程度を基準にしようという。1980年代初頭にすでにこのような見方を提案していた鶴見の先見の明に驚かされる。

この章ではまた、バナナ栽培に危険な農薬が大量に散布されていること

が指摘される。この部分は、バナナ不買運動に繋がるなど、大きな反響を呼んだ。鶴見の意図は、バナナ栽培農民が多国籍企業のもてで苦しみながら作っている果物を、私たち日本で暮らす人間がどのように味わったらよいかという問いを考えることにある。そもそも「食べて安全かどうか」というだけの捉え方には、作ってくれた人々の労働が見えなくなった消費者のエゴイズムが感じられると鶴見は指摘する。

ちなみに鶴見は、バナナを買って食べる。現場を歩いてものを書く調査マンは、そのモノにつきあうのが職務上の義理だからであり、また、自分の上に立って人に指令を与えるような形の（社会）運動はあまり好きではないからだという。自分の提供した情報によって読者が判断すべきであり、それはある種の民主主義の問題だとする（鶴見 1995）。こうした鶴見の明確な態度そのものも、読者それぞれの立場で考えるための材料になるであろう。

第8章では、フィリピンでの港渡しの価格が、日本での小売価格までどのように上がってくるかを述べている。

第9章はまとめであり、最後に、日本の読者に厳しい問いかけがなされる。

……つましく生きようとする日本の市民が、食物を作っている人びとの苦しみに対して多少とも思いをはせるのが、消費者としてのまっとうなあり方ではあるまいか。

私たちは豊かでかれらは貧しく、だから豊かな私たちがかれらに思いを及ぼすべきだというのではない。作るものと使うものが、たがいに相手への理解を視野に入れて、自分の立場を構築しないと、貧しさと豊かさのちがいは、一言いかえれば、かれらの孤立と私たちの自己満足の距離は、この断絶を利用している経済の仕組みを温存させるだけに終わるだろう。

本書が出版されてすでに40年以上経過するが、この問いは今なお有効である。

『バナナと日本人』と鶴見の著作

鶴見によれば、本書は各論であり、ほぼ同時期に書かれた『アジアはなぜ貧しいのか』が総論だという（鶴見1982）。総論というのが決して抽象的な議論が展開されているのではない。アジアの農民が貧しい理由を植民地時代にさかのぼって、より長期の視点から、かつ、フィリピンに加えてマレーシアとインドネシアの事例とも比較して、東南アジア島嶼部全体の視点から、アジアの農民の貧しい理由を考察している。

また、鶴見は50歳を過ぎてから猛烈な勢いで本を書いた。その全貌については、『鶴見良行著作集（1～12）』を参照されたい（鶴見ほか1998）。1980年代以降の研究作品に限れば、鶴見の研究作品にはふたつの流れがある（村井1998）。フィリピン輸出加工区（バタアン）の研究から始まり、バナナ、エビ、ヤシと繋がる、モノに関する調査研究である。これらの主題は、日本と東南アジアの関係である。もうひとつの流れは、『マラッカ物語』、『マングローブの沼地で』、『海道の社会史』、『ナマコの眼』、『ココス島奇譚』である。赤嶺淳によれば、これは海から陸を見つめなおしてみようという作品群である（赤嶺淳2006）。分類というほどではないが、鶴見自身が意識していたことは、本書は、日本人にとって身近で“感情移入”が可能なモノを取り上げた事例研究であり、『マングローブの沼地で』は、なじみは少ない“地理書”のような体裁、そして『ナマコの眼』はその折衷であるという（鶴見1995）。

本書の拡がり

鶴見は60歳を過ぎて本格的に大学教育に携わったと書いたが、それま

でにさまざまな形で勉強会を共にし、ともに歩き、影響を受けた人たちは多数いて、多くの成果が出されている。紙幅の関係上、成果をここで紹介することはできないが、モノに関していえば、バナナ、エビ、ココヤシ、ナマコ、カツオ等に展開し、それは現在もなお、拡大中である。

また、鶴見の研究活動は、デジタルアーカイブで確認することができる。とくに、写真やノートは、鶴見の研究足跡を知り思索を追ううえで大変貴重なモノである。あわせて参考にしてほしい。

参考・関連文献

- 赤嶺綾子. 2006. 「鶴見先生のこと 教え子からみたその人となり」『ビオストーリー』6. 昭和堂.
- 赤嶺淳. 2006. 「同時代史をみつめる眼 鶴見良行の辺境学とナマコ学」『ビオストーリー』6. 昭和堂.
- 村井吉敬. 1998. 「鶴見良行バナナ研究とその周辺」『鶴見良行著作集 6 バナナ』鶴見良行（著）、村井吉敬（編）。みすず書房.
- 鶴見良行. 1982. 『アジアはなぜ貧しいのか』朝日新聞出版.
- . 1995. 『東南アジアを知る—私の方法』(岩波新書) 岩波書店.
- 鶴見良行文庫デジタルアーカイブ (立教大学共生社会研究センター内) <http://tsurumi.rcccs.rikkyo.ac.jp/index.html>
- 鶴見良行（著）、鶴見俊輔（編）。1999. 『鶴見良行著作集 1 出発』みすず書房.
- （著）、吉川勇一（編）。2002. 『鶴見良行著作集 2 べ平連』みすず書房.
- （著）、——（編）。2002. 『鶴見良行著作集 3 アジアとの出会い』みすず書房.
- （著）、中村尚司（編）。1999. 『鶴見良行著作集 4 収奪の構図』みすず書房.
- （著）、鶴見俊輔（編）。2000. 『鶴見良行著作集 5 マラッカ』みすず書房.
- （著）、村井吉敬（編）。1998. 『鶴見良行著作集 6 バナナ』みすず書房.
- （著）、花崎皋平（編）。1999. 『鶴見良行著作集 7 マングローブ』みすず書房.
- （著）、村井吉敬（編）。2000. 『鶴見良行著作集 8 海の道』みすず書房.
- （著）、中村尚司（編）。1999. 『鶴見良行著作集 9 ナマコ』みすず書房.
- （著）、花崎皋平（編）。2001. 『鶴見良行著作集 10 歩く学問』みすず書房.
- （著）、森本孝（編）。2001. 『鶴見良行著作集 11 フィールドノート I』みすず書房.
- （著）、——（編）。2004. 『鶴見良行著作集 12 フィールドノート II』みすず書房.

❖本書の著者紹介（鶴見良行）

1926年アメリカ・ロスアンゼルス生まれ。1952年東京大学法学部卒業。1955年財団法人国際文化会館に就職。1965年「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）立ち上げメンバーとして参加。同年、アメリカ・ハーバード大学のセミナーに参加するため、南ベトナムを経由して渡米。サイゴン（現ホーチミン）で、南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）兵士の公開処刑を眼前にし衝撃を受ける。1989年龍谷大学経済学部教授に就任。1994年逝去。

❖執筆者紹介（柳澤雅之）

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門は東南アジア生態史、ベトナム地域研究、農業生態学。感銘を受けた本は、今西錦司。1972.『生物の世界』講談社。

歷史

トンチャイ・ウィニッチャクン

『地図がつくったタイ』

——国民国家誕生の歴史』

石井米雄（訳），明石書店，2003

Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*.
Honolulu: University of Hawai'i Press.

地図がつくったタイ

国境紛争や国境の画定という話題を時々耳にすることがあるだろう。一つの国が領土を保有し、主権を行使し、その領土は明確な国境線に区切られた地図として示される。領土争いが生じると、時に古い地図や記録を持ち出してその根拠を提示し、係争地が我国に帰属することを主張する。こうしたことは、いわば当たり前の話として受けとめられているのではないか。——本書は、シャム（タイ）を事例にこうした当たり前とみなされる事象に、歴史的視点から再考を促す。国民国家の地理的領域に関する研究は限られ、かつ「これまで、前近代的な言説の場において発生した出来事を、近代的な空間概念の存在を前提に説明するという、誤解を招く歴史解釈が横行してきた」と著者トンチャイは指摘する（p.48）。こうした研究状況に対して、本書は領域や境界をめぐる民俗知の新たな地理学的言説によ

る置換と、それにより生じた紛争、対決、誤解の提示に力点が置かれる。

議論の中心は、19世紀後半における近代的な地理学の導入と、それに基づく地図作成である。しかし検討の対象は、単に測量をして国境を画定し地図を作成するという作業のみではない。「全編を通じての中心的課題は、いかにして地図が、近代的国民国家の^{ネーション}地理的^{ジオボディ}身体を創造したか」(p.49)であり、地理や空間をめぐる前近代的言説と近代的言説の衝突、および後者による前者の置換の瞬間を捉え分析する試みが提示される。なお、「地理的身体」は著者トンチャイ自身の造語であり、「定義は厳密でもなく、議論の余地を残している」(p.47)というが、一つの国民国家の地図が、単に国境で区切られた空間や領域を超え、誇りや愛、憎悪や条理・不条理などの源となり、国民という観念の他の構成要素と結合してその観念にかかわる多くの観念と実践を創出する「一国民国家の^{ネーション}生活形成要素」(p.48)であるという問題提起が含まれていると考えられる。

ではシャムの地理的身体はいかにして生まれたのか。この過程を検討するため、まずシャムの前近代的空間概念を確認する。前近代のシャムには空間をめぐる民俗知として、トライプーム(三界経)を表現した図など複数の空間の語り口があった。こうした中、キリスト教宣教師たちにより新たな地理学と天文学が紹介される。それを取り入れ占星術など既存の知に挑戦したのが、四世王モンクットを中心とする知識人であった。1868年モンクットによるワーコーにおける日蝕観察が新旧の知の衝突の一つのクライマックスであった。

それがさらに暴力的な知の置換となったのは、パークナム事件(1893年)に象徴される英仏の植民地との領土獲得や国境画定、地図作成をめぐる競争であった。1826年イギリスがテナセリム(現在のミャンマーの最南地域)を植民地化して以来、シャムに「国境」の制定を迫るが、当初バンコクの宮廷が理解する「くにざかい」の認識は、中央権力が決定・認証すべきものではなく、幅があり、時に途切れ、その外側に誰にも属さない緩

衝地帯が残されているなど、イギリスのいう「国境」とは似て非なるものであり、両者の交渉はすれ違った。また政治権力間の関係は階層的であり、シャムの周縁には「プラテーサラート」（朝貢国）と称された小王国が存在し、時に複数の大国に二重、三重に服しながら、独自の統治を行っていた。周縁は複数の主権と服属関係が重なりあう流動的な空間だった。

それが19世紀後半、とくに1880年代に至り周縁地域に英仏が進出してくると、シャムのエリートもまた近代的な国境や主権の観念を獲得し、「これらの周辺諸国を征服し、それを排他的主権領域内にとりこむため、ヨーロッパとの抗争に突入した」のであった（pp.188-189）。メコン川流域を断続的に襲撃したホーと称される匪賊を駆逐するという名目で軍隊を派遣するとともに地図作成を進め、実質的な支配を行使したことがなかった地域を我がものにしようとした。したがってシャムは「植民地主義の哀れな犠牲者ではなかった」（p.188）。敗者は、シャム軍とフランス軍の進路にあたった弱小首長国であり、勝者は近代地理学であったということになる（p.238）。

地理的身体と歴史

近代的地理学の導入や地図作成による地理的身体の形成過程とならぶ本書の柱は、地理的身体と歴史およびタイらしさや国民（国家）としての観念との関係である。1893年以降に初めて登場した国境で区切られたシャムの地図により、シャムは地理的身体なるものを獲得した。それは、新たに「主権と国境線という概念で規定される政治空間」であった。この地理的身体は、空間に関する民俗知を置換し、シャムの周縁に存在していた小首長国の重層的に重なる主権を国境で切り分けて清算し、新たな政治空間に君臨するバンコクの王権の統治空間の一部に変換した。

しかもそこで終わりではなかった。人工的産物であった地理的身体は、大地の自然性、共通の起源を示す「チャート」、そして王権の神聖性と結

合して、空間の規定という役割を超えて、新たな価値や文化を創出する一助となっていく。内外を分かち知の基盤となり、敵を創出するとともに、「国民という観念」を表現し、ナショナリズムや愛国主義のメッセージを喚起する手段として利用されていくのである。地図は再生産を重ね、シンボルとしてさまざまな場面で使われる一方、この新たな空間概念は過去と結合して、新たな歴史を生み出していった。

その新しい歴史とは、フランスを貪欲な植民地主義者として、シャムを無辜な犠牲者とする筋立てであった。その語りは「メコン河左岸流域は疑いもなくシャムに帰属していた」という理解を前提とし、フランスにより略奪されたという悲劇となる。そして19世紀末以降進められたシャムの近代化政策は外国の脅威に対抗した防衛手段であり、シャムの独立維持は地方に介入し中央集権化を進めた賢明な王族エリートに帰せられることになる。

こうした歴史の理解がシャムの地理的身体が前近代に遡り存在していたという前提の上に成り立っていると看破するトンチャイの議論は、タイの歴史的連続性と均質性、国王が適切に国家の近代化を推進し、賢明に対処したがゆえに自力で近代的国民に変わった伝統的な国家という理解、そして植民地勢力による領土喪失という通説を覆す。同時に、バンコク中心の視点の下に、自立を保っていた周縁の小王国がその自立性を奪われ、主体を喪失する様を明るみに出す。

史料とディスコース分析

さて本書は、地理的身体形成の歴史的プロセスを追うが、主に依拠した史料は、20世紀初頭にシャムのエリートにより編纂された *Burney Papers* や『史料集成』に納められた各地の年代記など、いずれも公刊された文献である。別言すれば、大学の図書館などで手にすることができるよく知られた史料や文献をまったく新たな視点から読み直すことにより、既存の理

解を覆す議論を提起することが可能であることを示す好例である。

その一方で、本書の議論がこうした史料に制約されていたことを指摘する声もあり、また新たな史料開拓の余地も残されている。この点に関連して、トンチャイの議論が言説分析であることに対して批判が寄せられた点にも留意する必要がある（Wijeyewardene 1991; O'Connor 1997; Thongchai 1996: 73）。

例えばオコナーは、本書がバンコクのエリートに有利なわずかな残存史料に依拠しており、その視点の偏りは、テキストによる表象をリアリティと同等視する理論により強化されていると批判する。また本書における言説はヘゲモニックなモノログであり、他の言説との対話や交渉の余地がないと指摘した。

ここでオコナーの念頭にあったのは、いかにして内なる敵が中国人商人から急進的な学生へと転換したかという問題であった。この点に関連して、中国史研究者ドゥアラも同様の問題提起をしている（Duara 1995）。地理的身体が、あたかも確立した事実として提示されている傾向があるのではないかと指摘し、また領域を基盤にしたネーションフッドの観念との間に緊張を生じさせる他の観念の存在に注意を喚起し、とくに歴史的に問題となってきたエスニック・チャイニーズの存在と地理的身体との関係について課題を提起した。

確かに、タイのナショナリズムを考えるうえで中国系住民の存在は重要な問題の一つであったにもかかわらず、本書においてタイ人らしさや国民としての観念の議論で「中国」(China) や「中国人」(Chinese) にはほとんど言及がなく、索引にも採用されていない。また本書刊行後、19世紀末に民族カテゴリーが生み出され、領域内の人々が文明と野蛮に振り分けられ、野蛮とみなされた人々が他者化される過程を考察した論考を著したが、「中国人」については、重要性は認めつつ、問題の複雑さを理由に検討から除外したと述べる（Thongchai 2000）。複雑かつ研究蓄積がある領域

ゆえの難しさもあるかもしれないが、管見の限り「中国」や「中国人」が地理的身体をめぐる議論にいかに関連するかについては、現時点で検討はなされていないようである。——なお、英仏との国境画定交渉と対中関係や国内の中国系住民の存在とが関連していたことを示唆する史料は、断片的ながら存在する。

いずれにせよ、これからもトンチャイの著作から多くを学びつつ、さらなる問いを立てて思索を深め、新たな史料と歴史の可能性を探り、提示していく必要があろう。もともなった博士論文も含めて本書はナショナリズム研究に多大な貢献をなしたが（アンダーソン 1997: 284-293）、例えばビルマやシャン地域の統治や境界域の調査に従事したジェームス・G・スコットが収集した豊富な地図史料を、在地、植民地権力、そしてグローバルな文脈に置いて検討した研究（e.g. De Rugy 2020）など——国民国家の議論に収れんされない——新たな研究も生まれている。

この挑戦的な著作は、トンチャイ氏自身の1976年10月6日事件の体験に基づくタイ国家やナショナリズムに対する強い問題意識と批判精神に支えられて生まれた。その後10月6日事件について探求を進め、当事者の1人として、そして歴史研究者として、という——必ずしも一致せざる——二つの立場から、その記憶と忘却を現代政治史の文脈において考察した著作を出版した（Thongchai 2020）。本書の理解を深めるためにもあわせて読んでみてはいかがだろうか。

参考・関連文献

- ベネディクト・アンダーソン、白石さや・白石隆（訳）、1997、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（増補版）NTT出版。（原著：Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised edition. London and New York: Verso.）
- 飯島明子、2003、「Nation と Geo-body」『岩波講座 東南アジア史 別巻—東南アジア史研

- 究案内』池端雪浦ほか（編集委員）岩波書店，pp.86-92.
- De Rugy, Marie. 2020. "Looting and Commissioning Indigenous Maps: James G. Scott in Burma." *Journal of Historical Geography*. 69: 5-17.
- Duara, Presenjit. 1995. "Review, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation* by Thongchai Winichakul." *The American Historical Review*. 100(2): 477-479.
- O'Connor, Richard A. 1997. "Review, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*, by Thongchai Winichakul." *The Journal of Asian Studies*. 56(1): 279-281.
- Thongchai Winichakul. 1996. "Maps and the Formation of the Geo-Body of Siam." In Tønnesson, Stein and Hans Antlöv ed. *Asian Forms of the Nation*. Richmond: Curzon, pp.67-92.
- . 2000. "The Others Within: Travel and Ethno-Spatial Differentiation of Siamese Subjects 1885-1910." In Turton, Andrew ed. *Civility and Savagery: Social Identity in Tai States*. Richmond: Curzon Press, pp.38-62.
- . 2020. *Moments of Silence: The Unforgetting of the October 6, 1976, Massacre in Bangkok*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Wijeyewardene, Gehan. 1991. "The Frontiers of Thailand." In Reynolds, Craig J. ed. *National Identity and Its Defenders: Thailand, 1939-1989*. Clayton, Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.157-190.

❖本書の著者紹介（トンチャイ・ウィニッチャクーン）

ウイスコンシン大学名誉教授。シドニー大学大学院で修士号，博士号（歴史学）を取得した。本書は博士論文をもとにしている。その後ウイスコンシン大学マディソン校歴史学科で長らく教鞭をとった。タイ近現代史研究を専門とし，インテレクチュアル・ヒストリーを中心に数多くの著作がある。

❖執筆者紹介（小泉順子）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。専門はタイ近代史。

レイナルド・C・イレート

『キリスト受難詩と革命』

—— 1840～1910年のフィリピン民衆運動』

清水展・永野善子（監修），川田牧人ほか（訳），法政大学出版局，2005

Reynaldo Ileto. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University.

〈底辺から〉の歴史へ

フィリピン人歴史家レイナルド・イレートの名著『キリスト受難詩と革命— 1840～1910年のフィリピン民衆運動』が描いているのは、スペイン植民地支配に対する蜂起として始まったフィリピン革命（1896年）から、米西戦争（1898年）に勝利したアメリカ合衆国が、スペインに代わりフィリピンを植民地化することに抵抗した一連の民衆運動の軌跡である。本書の最大の特徴として指摘すべきは、ルソン島低地社会で当時膾炙していたイエス・キリストの受難を描いたタガログ語の歌や詩、土着化した宗教的儀式や実践に着目しながら、「無知」で「盲目」とされてきた民衆の視点から革命運動を描き出していることである。

いわゆるエリートが主導したことを強調する従来のフィリピン革命論に対して、最初に異を唱えたのはフィリピン史研究の重鎮テオドロ・アゴ

ンシリョであった。アゴンシリョは、1956年『大衆の反乱—ボニファシオとカティプーナンの物語』（*Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan* 未邦訳）を刊行し、アメリカ植民地時代の歴史教科書では軽視されていた革命結社カティプーナンとその創設者アンドレス・ボニファシオの役割に初めてスポットライトを当てた。アゴンシリョによれば、「世界史を広く見た場合、武器を持って民族自決のために闘った人物が英雄でないのはフィリピン史だけである」という。

イレート自身、アゴンシリョから多くの触発を受けており、『大衆の反乱』が存在しなければ、本書が世に出ることはなかったといっても過言ではない。とはいえ民衆の視点から革命史を描き出すという目的を共有しているからこそ、イレートはアゴンシリョに対して異議も唱えている。例えば西洋からもたらされた独立の意味は、エリートだけでなく民衆たちも理解していたと論じたアゴンシリョに対して、次のような批判をイレートは寄せた。

大衆——革命の大衆的基盤をなし、おもに地方に住み公教育を受けていないフィリピン人たち——にとって革命がもつ意味については、疑問が残されたままである。有産知識階層の思考のなかで明らかに表現されることがなければ、大衆のものの見方や目標は形をなさず不完全で意味をもたなかったなどと、考えるわけにはいかない。（p.10）

近代西洋の諸概念によって、フィリピン革命に参加した民衆の思考や目標を理解するのではなく、民衆の世界観に基づいて理解すること、そのためにイレートが着目したのが、フィリピン化されたカトリシズムであった。イレートによれば、民衆が朗読しながら慣れ親しんでいたイエス・キリストの受難の物語（『パッション』）は、フィリピン社会において相矛盾する二つの機能をもっていたという。一つ目の機能は、スペイン人植民者た

ちがスペインと教会への忠誠をフィリピン人に教え込むというものであった。そして植民者や宣教師たちが予測しなかった二つ目の機能は、聖書がタガログ語へと翻訳されたことによって、キリスト受難の物語がフィリピン人の置かれた境遇を照らし出す鏡になったことである。すなわち『パシオン』というタガログ語のテキストを通じて、民衆たちはスペイン植民地支配下に置かれた自らの状況を理解し、失われた母なる祖国を取り戻すために、武器をもって立ち上がったのである。なお原著では、『パシオン』は英訳されておらず、ここにイレートの脱西洋中心的な思考の一端を垣間見ることができる。

各章の要約

本書は、1章を含めた全6章とエピローグによって構成されている。1章については、上で紹介したので、ここでは2章以降の概要を記したい。

2章「光と兄弟愛」では、1841年タヤバス州においてスペイン植民地体制に抵抗した聖ヨセフ兄弟会のリーダー、アポリナリオ・デ＝ラ＝クルスの教えが描かれている。アポリナリオは、民衆に対して苦難が長期化したとしても、自己を律し、内心にあるものを変えないことを説き、「タガログ人のキリスト」として崇められていた。兄弟会には多くの人々が参加し、成長を遂げたのだが、このことを危険視した当局は、武力をもって弾圧した。アポリナリオたちは街から逃げ、近くの山に潜伏し抵抗を続けたが、鎮圧された。アポリナリオを筆頭に200人が処刑されたが、反乱の目的について尋問された際、彼らの多くが「祈るためだった」と答えたという。

3章「伝統と反乱」では、『パシオン』の詩歌や演劇を使って、カティプーナンの会員たちを鼓舞したアンドレス・ボニファシオが描かれている。従来のボニファシオ像は「無学」、「貧困層」、「狂気」といったイメージがつきまとっていたのであるが、イレートによれば、ボニファシオの説教はアポリナリオと同じく民衆の言葉や経験に根ざしており、民衆から絶大な

支持を得ていたという。

4章「共和国と1896年の精神」では、カティプーナンの会員たちの間で読まれていた詩歌が分析されている。これらの詩歌では、革命運動に参加したタガログ人たちの栄光が称えられている。抵抗する相手がスペイン軍からアメリカ軍に変わった後にも、彼らの経験が詩歌を通じて共有されることによって、祖国を受難から救うカティプーナンの精神は世代を越えて受け継がれてきたのである。

5章と6章では、アメリカ合衆国大統領セオドア・ルーズベルトが米比戦争の終結宣言を出した1902年以降も、ねばり強く抵抗運動を続けたマカリオ・サカイとフェリペ・サルバドールという2人のリーダーに焦点が当てられている。彼らはすべての人々が兄弟となり、指導者たちはキリストのようになり、あらゆる抑圧から解放され、財産が分配される社会を作り出すためにアメリカ軍や治安警察隊と闘っていた。逮捕後、サカイもサルバドールも絞首刑に処されたのだが、その場には彼らを慕う多くの民衆が集まり、祈りを捧げた。

本書への評価

現在でこそ本書は、フィリピン革命史研究の古典であると周知されているが、1979年に刊行された際には、フィリピン内外より厳しい批判が寄せられた。それらを簡潔にまとめると、①小説のような手法に依った本書は「実証的」、「客観的」な歴史書とはいえないこと、②『パシオン』がカティプーナンのイデオロギーにどれだけ影響を与えていたのかを証明していないこと、③革命運動に参加したエリートや民衆の社会経済的な動機が軽視されていること、などである。

さまざまな論者たちが本書への批判を行ってきたが、裏を返せば、本書がいかにも多くの論者たちにインパクトを与えてきたのかということである。「合理性」や「世俗性」に基づかない民衆の世界観へ読者を誘う魅力を本

書は備えており、論者たちはその世界観についての論理的、あるいは実証的な説明が必要であると考えたからこそ、このような批判が行われてきたといえる。

ポストコロニアル研究の台頭

刊行当初はさまざまな論争を巻き起こしたが、1980年代以降、アジアやラテン・アメリカ、アフリカなど旧植民地出身の研究者たちが、従来の西洋中心的な学問に対して異を唱え、学問と政治の関係を鋭く問うポストコロニアル研究という新たな分野が開拓される中で、本書は一躍脚光を浴びた。一連のポストコロニアル研究の中でも本書は、とりわけインド研究者たちによって展開されてきた非エリート階層の役割に着目したサバルタン研究と、さまざまな関心を共有している。

さらに旧植民地出身の研究者たちは、欧米研究者たちのように「客観的」、「第三者的」な立場を取ることが困難であり、政治と学問を切り離すことができない状況に置かれてきたことも強調したい。本書の元となるコーネル大学に提出した博士論文を執筆していた1970年代前半、イレートは反マルコス運動や反ベトナム戦争運動に参加していた。このような運動に参加しながら、カティプーナンの革命運動は、確かに失敗したが、この出来事はフィリピン史の中で葬り去られたわけではなく、その後現れた社会変革を実現しようとするリーダーや抵抗組織の間で、〈未完の革命〉論として現在まで受け継がれてきたことを、イレートは鋭く感じ取っていたという。そして1979年の刊行以降、本書はマルコス独裁体制に反対する政治運動を展開した多数の司祭、修道女、学生たちに読まれ、勇気を与えてきた。

私は博士課程において、イレートの指導を受ける機会に恵まれた。彼のアドバイスの中で印象に残っているのは、「西洋発の理論や手法に頼るのではなく、自分の直感や考えを信じてみることを、それによって多くの研究

者から批判されたとしても、未来の状況は変わるかもしれない。私はこの未来への賭けでこれまで勝ってきた」というものであった。過去を取り扱う歴史家の目線が、未来にも向けられていること、ゆえに刊行から40年以上の歳月が経っても、本書が不朽の名作といわれる所以なのかもしれない。なお邦訳では、日本の読者に向けた序文が新たに設けられており、イレートは本書がアメリカ帝国に対する〈底辺から〉の抵抗書として読まれることを期待している。

参考・関連文献

- Agoncillo, Teodoro. 1956. *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*. Quezon City: University of the Philippine Press.
- [Ileto, Reynaldo. 2011. "Reflections on Agoncillo's *The Revolt of the Masses* and the Politics of History." *Southeast Asian Studies*. 49\(3\): 496-520.](#)

❖本書の著者紹介（レイナルド・イレート）

1946年マニラ生まれ。1967年アテネオ・デ・マニラ大学卒業。1970年コーネル大学修士号、1975年同大学博士号取得。専門はフィリピン史、東南アジア研究。フィリピン大学、ジームス・クック大学、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学などで教鞭を取った。ハリー・ベンダ賞（1985年）、大平正芳賞（1986年）、フィリピン国立図書賞（1999年）、福岡アジア文化賞（2003年）、グラント・グッドマン賞（2011年）を受賞。

❖執筆者紹介（芹澤隆道）

京都大学東南アジア地域研究研究所機関研究員。専門はフィリピン史、日本思想史。感銘を受けた本は本書。

弘末雅士

『東南アジアの港市世界』

——地域社会の形成と世界秩序——

岩波書店, 2004

東南アジア世界は二つの側面を持っている。一方でこの地域は東西海上交易の要衝に位置し、外部世界から多様な人々を惹きつけてきた。また一方で、熱帯地方の豊かな自然環境に恵まれ、貴重な交易商品を産する空間が内陸部に広がっている。このような東南アジアの「内」と「外」の側面を結びつけたのが港市である。港市には外部世界から商人や旅行者らが訪れ、国際色豊かな「文明世界」が形成された。これに対し内陸部については、港市を訪れた外来者たちは、自然との境界が曖昧な野蛮な人々が住む「非文明世界」が存在していたと伝えている。本書は、東南アジアの「内」と「外」とを仲介する港市支配者の役割を中心に15世紀から18世紀における外来者・港市・後背地の関係を提示する。さらにそれを踏まえ、近代になりヨーロッパによる植民地支配が進展していく過程で、三者の関係性や仲介者の役割がいかに変容していったのかが論じられる。

港市国家論

アンソニー・リード (Anthony Reid) によれば、15世紀から17世紀にかけての東南アジアは「交易の時代」(Age of Commerce) と呼べる景気拡大の時代を迎えた。リードは当初、交易の時代は17世紀末に終わったと論じたが、彼自身のもを含むその後の研究によりこの見解は見直された。東南アジアにおける交易活動は、対中国貿易の拡大などを背景に18世紀においても活発であったことが明らかにされている。

国際交易活動の活性化のもと、東南アジア海域世界では数多くの港市が隆盛した。その代表的なものとして、北スマトラのパサイやアチエ、マレー半島のムラカ(マラッカ)やジョホール、ジャワのバンテンやドゥマク、大陸部のアユタヤやペグーなどがあげられる。16世紀になるとヨーロッパ勢力が東南アジアに進出するが、彼らが拠点として築いたバタヴィアやマニラなども港市であった。

この港市における交易活動と不可分に結びついて成立した政治形態のことを「港市国家(港市政体)」(port-polity) と呼んだのがJ・カティリタンビー・ウェルズ (Jeyamalar Kathirithamby-Wells) らである。港市支配者は、外部世界との交易を介してもたらされた富や文化を独占的に所有し、それを臣下に再配分することで経済的影響力と政治的権威を強化した。港市国家についての研究は、その類型論、海域ネットワーク、交易ルートの変遷などと関連して進められてきた。

これに対する本書の特徴は、港市とその後背地との関係に着目した点にある。本書の著者は元々、北スマトラの内陸社会を専門としていた。大半の港市は、交易商品や食糧を産出する后背地を内陸部に有していた。したがって、港市支配者は、外部世界だけでなく、后背地の生産者とも緊密な関係を構築する必要があった。本書は、后背地の住民に関する「奇習」の風聞や東南アジアに伝わる王統記の記述を検討し、港市支配者の「内」と「外」に対する「顔の使い分け」を明らかにしている。

外来者・港市・後背地の関係

本書によれば、15世紀から18世紀の東南アジア海域世界では、外来者・港市・後背地の間に次のような関係が構築されていた。

港市支配者は、他の港市と競合しながらより多くの外来商人を集めようとした。そのため港市には、多様な地域の出身者が集う外部に開かれた空間が形成された。そのような空間を統合するために、港市支配者は「世界秩序」を重視した。世界秩序とは、イスラーム、上座仏教、キリスト教、さらには中華世界との関係といったもののことである。港市支配者は「正統」な世界秩序を求めたが、さまざまな外来者を統合する必要性から他の世界秩序にも寛容な態度をとり、その複数との結びつきを主張する場合もあった。世界秩序との結びつきを示すうえで、港市支配者が中国の皇帝やアレクサンダー大王などと婚姻・血縁関係にあると伝えた王統記も重要な役割を果たした。さらに、港市に長期滞在する外来者と現地住民との混血者も、外部世界との仲介者としての役割を担った。

港市支配者の存立基盤は、外来者と内陸部の後背地を仲介することにある。そのため、外来者が後背地の住民と直接接触することは望ましくなかった。後背地の住民にとっても、外来者は病気を持ち込んだり人さらいをしたりする危険な存在であった。このような状況を背景に、後背地の住民の「奇習」についての風聞が流布した。その典型的な例が、彼らが「人喰い」であるとする語りである。港市でそのような風聞を耳にした外来者は危険な内陸部に行こうとせず、安全な滞在を保障してくれる港市支配者を仲介した取引を選んだ。外来者には、港市支配者が「野蛮」な後背地をも統治する「超人」と映り、その「超人間性」は交易活動の隆盛によって王権が強化されるとさらに増大した。

それでは、港市と後背地はどのような関係を築いていたのであろうか。ここで重要なのが港市支配者による「顔の使い分け」である。国際交易が活性化すると港市の影響力は後背地にも及ぶようになったが、港市は食糧

や交易商品を後背地に依存していた。後背地では、交易商品を生産・搬出しながら自らの食糧生産活動を保障できる体制が構築されたため、そこには農耕を司る権威が台頭した。港市支配者はそのような王権を尊重し、後背地の住民に世界秩序を押しつけようとしなかった。彼らは王統記の中で自分たちの出自を内陸部の権威と結びつけるとともに、自分たちが自然に影響を及ぼし彼らの生産活動を保障する力を持っていることを後背地の生産者に示した。

他方の後背地の王権に関する神話の中では、彼らの農業空間がその地域の始まりであり、港市支配者たちはその地から移り住んだ人々の子孫として描かれた。すなわち、後背地住民は内陸部の農耕を司る権威を中心に据え、自分たちこそがその地域の「土着民」であることを主張しながら、彼らの側でも港市支配者を血縁者と位置づけたのである。後背地の王権が王統記の中で港市支配者と血縁関係を主張する現象は、港市支配者がオランダ人の場合においてさえみられた。

近代における変容

以上のような外来者・港市・後背地の関係や東南アジアにおける仲介者の在り方は、19世紀以降になりヨーロッパ人による植民地支配が本格化していく中で変容していくことになる。ここでは、著者の専門であるインドネシアの事例が中心的に取り上げられている。

19世紀前半、パドリ戦争やジャワ戦争の結果、西スマトラやジャワ島がオランダによる植民地支配下に置かれていった。ただし、当初オランダは、地域社会の既存の有力者を取り込む間接統治を実施した。これらの人々がヨーロッパ人支配者を地域社会と結ぶ仲介者の役割を担ったことで、地域社会はヨーロッパ人にとって必ずしも統治しやすいものとはならなかった。しかし、19世紀後半にオランダによる植民地政策が直接統治へと転換すると、現地人有力者は無力化されていった。さらに、20世紀

前半までの植民地体制の確立の過程で、現地人向けの学校制度とそれに基づく官僚制度が導入された。統治の効率化のため現地人官吏が既存の現地人有力者の上位に置かれ、後者はヨーロッパ人支配者と地域社会とを仲介する役割を失った。また、植民地体制の中で後背地は特定の輸出用第一次製品の生産地として位置づけられ、食糧が必要な場合は他の地域から輸入するようになった。後背地の豊穡を司る権威は存在意義を低下させ、港市と後背地の関係性が崩壊したため「人喰い」など内陸部の「奇習」の風聞も語られなくなった。

しかし本書は、植民地体制下においても外部世界と地域社会とを結ぶ仲介者がいなくなってしまうわけではなかったと主張する。オランダ植民地政庁は多様な地域の出身の人々を人種的観点から分類し、法的に差異を設けた。その不平等を真っ先に感じたのが、ヨーロッパ人と地域社会を仲介してきた中国系やアラブ系の「外来東洋人」や欧亜混血者であった。彼らの間からそのような不平等の撤廃を求める動きが起こり、そこから植民地支配に対する対抗原理が構築され、現地住民による反植民地主義運動の端緒となった。長期滞在者や混血者は地域社会を「近代的な社会」に結びつける役割を果たしたのである。

さらに、オランダ植民地政庁は反植民地主義運動を抑えるために、結局は地域社会の仲介者に頼らざるをえなかった。植民地政庁は、現地人官吏やかつての現地人有力者を用いて反植民地運動についての情報を得ようとした。現地人仲介者たちは、植民地政庁と反植民地主義運動の参加者との間で情報を操作できる立場になった。現地人仲介者は常に植民地支配に協力したわけではなく、反植民地運動を支援して伝統的権威の回復を図ったり、地域社会の負担軽減や自治拡大を目指したりしたこともあったのである。

仲介者による「顔の使い分け」

東南アジアは、その地理的な条件から外部世界からもたらされた影響に常にさらされてきた。植民地支配期には、この地域の歴史は独自の文明を生み出さず外部世界の文明を受動的に受容してきたものとして描かれた。しかし東南アジア諸国の独立達成後になると、それぞれの国が持ってきた自律性を強調する歴史記述がなされるようになっていった。さらに現在では、外部世界からの影響の重要性は認めつつ、その影響を東南アジア地域社会が主体的・選択的に受容してきた点が重視されている。

本書で論じられた仲介者による「内」と「外」に対する「顔の使い分け」という視点は、東南アジア地域社会の自律性と外部世界からの影響の受容という問題を複合的に理解するうえで有効である。それは、前近代の港市を論じるのに限ったことではない。例えば、本書で取り上げられている植民地体制下の現地人官吏や現地人有力者の役割は、支配する側とされる側という二分法を超えた議論の発展に資するものである。植民地支配への関与ゆえに彼らが注目されることは現在でもまれであり、さらなる検討の余地が残されている。

また、東南アジア社会では、本書で扱われている以外にも多様な外来系住民が活躍してきた。これらの人々は、近代国家の中では、社会の周縁に暮らすマイノリティと見なされがちである。しかし、彼らを東南アジアの「内」と「外」とを結ぶ仲介者と捉えなおすことによって、彼らの住む地域社会を広域的な文脈の中で論じることが可能になるであろう。

参考・関連文献

アンソニー・リード、太田淳ほか（訳）、2021、『世界史のなかの東南アジア（上・下）』名古屋大学出版会（原著：Anthony Reid、2015、*A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*、Malden: Wiley-Blackwell.）

Kathirithamby-Wells, J. and John Villiers eds. 1990. *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*. Singapore: Singapore University Press.

- Reid, Anthony. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450–1680, Vol. 1: The Lands below the Winds*. New Haven: Yale University Press.
- . 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Vol. 2: Expansion and Crisis*. New Haven: Yale University Press.

❖本書の著者紹介（弘末雅士）

公益財団法人東洋文庫研究員。専門は海域東南アジア史。オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（Ph.D.）。主な著作として、『東南アジアの建国神話』、『人喰いの社会史—カンニバリズムの語りと異文化共存』、『海と陸の織りなす世界史—港市と内陸社会』（編著）がある。

❖執筆者紹介（山口元樹）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授。専門はインドネシア近現代史、東南アジアと中東アラブ地域との関係史。これまでに感銘を受けた本は本書の他に、家島彦一・1993.『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社。

政治

クリフォード・ギアツ

『ヌガラ』

—— 19世紀バリの劇場国家』

小泉潤二（訳）、みすず書房、1990

Clifford Geertz. 1980. *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*.
New Jersey: Princeton University Press.

ギアツと劇場国家論

本書は、東南アジア地域研究に限らず文化人類学においても古典としての地位を確立している名著である。本書は19世紀のバリを舞台に、それまで前提とされてきた国家観に新たな視点を提起した挑戦的な著作だった。しかし、挑戦的な著作の例にもれず、現在まで東南アジア研究者や文化人類学者からの厳しい批判を受けてきた。

著者のクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）は、1960年代から1990年代にかけて活躍したアメリカ人の人類学者である。ギアツは、ハーバード大学社会関係学科で社会人類学を学んだ。1952年から1954年、彼は、マサチューセッツ工科大学のプロジェクトに参加し、ジャワでの調査を開始した。1956年、ギアツはジャワの宗教に関する論文で博士号を取得した。その後、博士論文は『ジャワの宗教』（1960）として出版された。さ

らに、彼は1957年から1958年までバリでの調査を行った。ジャワやバリの調査からは、数々の重要な研究成果が生み出された。ジャワに関しては、『ジャワの宗教』『インボリューション—内に向かう発展』(1963)、バリに関しては、「ディーブ・プレー—バリの鬩鷄に関する覚え書き」(1972)、ヒルドレッド・ギアツ(Hildred Geertz)との共著『バリの親族体系』(1975)、そして本書があげられる。1970年にプリンストン高等研究所に籍を移して以降は、文化人類学の理論に関する著作を数多く残した。

そうした著作の中で本書は、ギアツのインドネシアにおける民族誌的な調査研究の集大成として位置づけることができる。本書には模範的中央、地位沈降のパターンそして劇場国家などの重要概念が登場するが、これらの概念の萌芽は「文化体系としてのイデオロギー」(1964)や『二つのイスラーム社会—モロッコとインドネシア』(1968)など、本書以前の著作に見ることができる。ギアツは、『二つのイスラーム社会』において、ジャワのマジャパヒト王国だけでなくスカルノ大統領による独立記念塔やモスクの建設そしてスポーツ競技大会の開催などの国家事業を劇場国家の再現であると指摘している。劇場国家論は、当初から19世紀のバリに限らず、現代政治にも適用可能な概念として構想されていたのである。

東南アジアの国家論

本書は、それに先行する東南アジアの王権論の影響を受けている⁽¹⁾。重要な東南アジアの王権論としては、R・ハイネゲルデン(Robert von Heine-Geldern)の「東南アジアにおける国家と王権の概念」(1942)、「ジャワ文化における権力観」(1970)およびS・J・タンバイア(Stanley Jeyaraja Tambiah)の『世界征服者と世界放擲者』(1976)があげられる。R・ハイネゲルデン

(1) 劇場国家と銀河系政体を含む東南アジア王権論に関しては、関本(1987)や永瀧(2007)の詳細な要約がある。

は、東南アジアのインド化した王国の王都や王宮などの中央は王国全体の縮図であり、中央が須弥山を軸としたインド的宇宙観を模写していることを指摘した。ギアツは、この「中央＝インド的小宇宙」という図式をさらに発展させた。ギアツは、4世紀から15世紀の東南アジアのインド的国家の中央を、「超自然的秩序の小宇宙」「政治秩序の有形的具象」である模範的中央として再定義し、インド的国家は模範的中央を舞台装置とした儀礼を統治の内実とする劇場国家であると指摘した。

他方、S・J・タンバイアは、タイの国家形成を論じた『世界征服者と世界放擲者』(1976)の中で、模範的中央や劇場国家の静的な国家観を批判し、それらの背後で展開される政治過程まで射程に収めた銀河系政体論を提起した。劇場国家が、模範的中央を頂点としたピラミッド型の国家像を前提としている一方、銀河系政体は、同型の型が同心円状に反復する曼荼羅の図像を前提としている(関本 1987; 永淵 2007)。東南アジア大陸部では、有力な中心的クニの周囲を、中央と同型の従属的クニが曼荼羅の図像のように取り囲んでいた。各クニは自律性を保っていたものの、婚姻連帯、役人の派遣、朝貢関係、軍事的支持や儀礼的奉仕などの紐帯によって結ばれており、従属的クニは有力な中心的クニの影響圏に引き寄せられた。各クニの影響圏は戦争、権力闘争や反乱によって絶えず伸縮したものの、クニ同士の均衡を統制する政治機構は存在しなかった。各クニが影響圏を伸縮させることで、クニの布置は銀河系のように絶えず変化した。銀河系政体論は、同型反復的なクニの絶えず伸縮する影響圏によって流動する動態的な国家観を提示した。

19世紀バリの劇場国家

ギアツは、タンバイアが銀河系政体論を提唱した4年後、本書を出版した。本書を読むうえで重要な点は、ギアツが、劇場国家は「民族誌学的アプローチ」による「古典期東南アジアにみられたインド的国家群の、(中

略) 一種の社会学的青写真である」と前置きしている点である。つまり、本書の目的は、古典期インド的国家群の理念型を提起することにあつた。

本書は、上流階級と村落の政治に関する前半部と、王宮儀礼に関する後半部の二部に分けることができる。前半部では、劇場国家が上流階級と農民階級の相互に独立した政体から構成されていたことが論じられる。上流階級の政治の本質は、地位と威信をめぐる競争だった。そして、この競争を規定していたのは地位沈降のパターンだった。バリ人たちの間では、始原こそが模範的な姿とされており、現在とは始原から逸脱した姿であるとされていた。始原からの遠近は、神々から現在に至る系譜によって測られた。始原から系譜が下降するほど、始原の神々の直系から傍系へ遠ざかるほど、地位は低下した。他方、村落における農民階級の生活は、上流階級の政治から分離していた。村落世界は、共同生活の単位である部落、灌漑を管理する水利組合、儀礼に関わる儀礼組織など、上流階級とは無縁な集団によって維持されていた。劇場国家は「中央集権的国家装置」を欠いており、上流階級と農民階級は、役人や徴税人たちを媒介とした緩やかな政治的紐帯によって結びついていただけだった。この緩やかな政治的紐帯によって構成された劇場国家とは、「頂点が一番不安定となっているトランプの家」だった。

不安定な国家の頂点で求心力を發揮したのは、王や君主たちが主宰した壮麗な儀礼だった。王や君主たちが儀礼によって目指したのは、儀礼の演劇が顕示する威厳さや鮮烈さによって模範となる始原の状態を現実化することだった。大規模な王宮儀礼は、「王と君主が興行主、僧侶が監督、農民が脇役と舞台装置係と観客であるような」一大集団演劇だった。この集団演劇の騒乱と熱狂によって、王宮の装飾、区画配置や神器などの舞台装置、そして中心に鎮座する王は象徴としての表現力を獲得した。これら象徴群が現実化したのは、政治的秩序の模範としてのインドの宇宙と宇宙の真理としての位階制である。

インド的宇宙と位階制の中で、王や君主たちは神の活性化した姿となり、聖なる偶像に変貌した。そして、王や君主たちが完璧な神の似姿に接近するほど、中央は模範的になり、国家は現実化した。王や君主たちは、集団儀礼が現実化する模範的秩序によって、自律的な村落や不安定な政治的紐帯を修正しようとした。「中央集権的国家装置」を持たない劇場国家の王や君主たちは、統治を目的としたのではなかった。むしろ、劇場国家と村落を結ぶ政治的紐帯は、儀礼のために人員や物資を動員する仕掛けであり、国家を現実化する集団演劇上演こそが王や君主たちの目的だった。

権力論としての『ヌガラ』

出版以降本書には数多くの批判が寄せられた。批判が集中した点は、ギアツが文化的側面を国家の側に、実際の権力関係を村落の側に分離している点や、劇場国家における政治の流動性を描いていない点である（関本 1987; 永淵 2007）。多くの論者が指摘してきたように、国家論としては、銀河系政体論の方が、具体的な政治の動態にまで射程に据えたより優れたモデルである。

では、ギアツが本書で提示した論点はすでに語りつくされたのであろうか。ギアツが銀河系政体論の後に本書を出版したことを考慮するならば、銀河系政体論では十分に論じられなかった点を論じることに、本書執筆の目的があっただろう。

ギアツは本書の最後を、西洋を起源とする古典的な権力観の批判に当てている。ギアツによれば、16世紀以降の西洋の国家観では、権力とは支配を目的として人々を「強制する力」であるとされ、儀礼は権力を正統化・合法化する道具や仕掛けとして外在化されてきた。古典的な権力観における国家儀礼は「力を誇張し、権威を称揚し、あるいは手続きを合法化」したが、「なにかを現実化することだけは」しなかった。

たしかに、「強制する力」として権力を捉える視点は現在まで継承さ

れている。他方、ギアツと同時代に活躍していたM・フーコー（Michel Foucault）も、マキャベリ以来の古典的な権力観の再検討を行っていた。フーコーが論じたように、西洋においても権力は主権権力、規律訓練権力や生権力（司牧権力）などの複数のタイプに類型化できる。劇場国家の儀礼の「顕示や栄誉や演劇」は、人々を「強制する力」ではなく、模範的な秩序や「真理」を「構成する力」であるという点で、フーコーの権力観と類似している（cf. 大澤 2019）。

バリの王や君主たちが華麗な儀礼を主宰することで行使したのは、人々を「強制する力」というよりは、模範としてのインド的宇宙や宇宙の真理である位階制を「構成する力」である。劇場国家における儀礼の目的は、模範としての宇宙や位階制を現実化することであり、この目的を達成する手段こそが儀礼だった。そして、儀礼の上演とインド的宇宙や位階制の現実化が表裏一体の関係にあるとするならば、この権力から正統性やイデオロギーだけを分離することはできない。むしろ、華麗な儀礼の上演自体を「構成する力」として捉えない限り、儀礼は、権力を正統化・合法化するための道具や仕掛けに還元されてしまう。

本書は、多様な読み方や思考を触発する刺激的で挑発的な作品である。ギアツ自身も日本語版への序文の中で、本書を「発見の導きとなるべき著作であった」と述懐している。本書には語りつくされていない論点はまだ数多くあるはずであり、インド的國家の古典的な権力論としての読み方も、その中の一つであろう。

参考・関連文献

- ベネディクト・アンダーソン．中島成久（訳）．1995．「ジャワ文化における権力観」『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』日本エディターズスクール出版部．（原著：B. R. O' G. Anderson. 1972. *The Idea of Power in Javanese Culture*. In C. Holt ed. *Culture and Politics in Indonesia*. Ithaca NY: Cornell University Press.）
- クリフォード・ギアツ．林武（訳）．1973．『二つのイスラーム社会—モロッコとイ

- ンドネシア』(岩波新書)岩波書店。(原著: Clifford Geertz. 1968. *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*. New Haven: Yale University Press.)
- 吉田禎吾・鏡味治也(訳). 1989. 『バリの親族体系』みすず書房。(原著: Clifford Geertz. 1975. *Kinship in Bali*. Chicago and London: University of Chicago Press.)
- 池本幸生(訳). 2001. 『インボリユーション—内に向かう発展』NTT出版。(原著: Clifford Geertz. 1963. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.)
- 関本照夫. 1987. 「東南アジアの王権の構造」『現代の社会人類学 3 (国家と文明への過程)』伊藤亜人ほか(編), 東京大学出版会.
- ミシェル・フーコー, 高桑和巳(訳). 2007. 『ミシェル・フーコー講義集成 <7> 安全・領土・人口』筑摩書房。(原著: Michel Foucault 2004. “Sécurité, Territoire, Population.” In Michel Senellart ed. *Cours au Collège de France 1977-1978*. Paris: Seuil/Gallimard.)
- 永渕康之. 2007. 『バリ・宗教・国家—ヒンドゥーの制度化をたどる』青土社.
- 大澤真幸. 2019. 『社会学史』(講談社現代新書)講談社.
- ロバート・ハイネ＝ゲルデルン, 大林太良(訳). 1972. 「東南アジアにおける国家と王権の概念」『神話・社会・世界観』大林太良(編), 角川書店。(原著: Robert von Heine-Geldern. 1942. *Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia. The Far Eastern Quarterly*. 2(1): 15-30.)
- Tambiah, S. J. 1976. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*. Cambridge University Press.

❖本書の著者紹介(クリフォード・ギアツ)

アメリカの文化人類学者。象徴を通じて文化をテキストとして解釈する解釈人類学を提唱した。主な著作に『文化の解釈学』『文化の読み方／書き方』などがある。

❖執筆者紹介(西島 薫)

京都大学学際融合教育研究推進センター特定助教。専門はインドネシア地域研究, 文化人類学, 政治人類学。感銘を受けた本に, レヴィ＝ストローズ『今日のトーテミズム』。

ベネディクト・アンダーソン

『比較の亡霊』

——ナショナリズム・東南アジア・世界』

糟谷啓介ほか（訳），作品社，2005

Benedict Anderson. 1998. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*. London and New York: Verso.

アンダーソンの知的営為

ベネディクト・アンダーソンは、東南アジア研究、ナショナリズム研究で世界的に知名度の高い学者である。ナショナリズムを研究する人、あるいは、少しでもナショナリズムに関心がある人であれば、彼の『想像の共同体』（*Imagined Communities*）は必読文献である。国民（ネーション）という想像の産物がどのようにして生まれ、国民国家（ネーション・ステート）がいかにしてグローバルスタンダードになっていったのかを、時間観念の変化、出版資本主義の登場など、独創的な視点から分析したもので知的刺激に富んでいる。

アンダーソンは、ケンブリッジ大学で西洋古典を学んで学部を卒業した後、1958年にコーネル大学の大学院に入り、インドネシア政治研究を始めた。1961年から1964年にかけて、インドネシアの首都ジャカルタで

フィールドワークを行い、インドネシア語、ジャワ語、オランダ語も駆使して博士論文を書き上げた。それは、インドネシアの独立戦争において活躍した革命にはやる青年層、インドネシア語でいう「プムダ」(pemuda)に着目したもので、『革命期のジャワ』(Java in a Time of Revolution)というタイトルで出版された。インドネシアの独立期研究の古典である。その後、インドネシアの政治を主に文化的視点から分析する一連の研究を発表しており、その成果は『言葉と権力』(Language and Power)として出版された。欧米とは異なるジャワの権力概念を描いた論文などは、インドネシア政治文化研究としては屈指の出来である。

スハルト権威主義体制の屋台骨である陸軍に批判的な文章を書いたためにインドネシアに入国禁止となったアンダーソンは、タイとフィリピンの研究も始め、また、ナショナリズムの起源と流行に関する研究を進めていった。本書は、こうしたアンダーソンの知的営為の成果である。訳書は非常にわかりやすい日本語で書かれている上に、訳書の最後には、本書の理論面でわかりにくい点についての高地薫による丁寧な解説、さらには全体像の説明がある。そこで、ここでは、私が本書（あるいは、アンダーソンの研究）の特徴と思う2点に絞って、いくつかの章を紹介していくことにする。一つ目はタイトルにある比較であり、もう一つは変化（の兆し）への関心である。

比較する

この本のタイトルである「比較の亡霊」という言葉は、フィリピン最初のナショナリスト（といえる）ホセ・リサールが書いた小説『ノリ・メ・タンヘレ』に出てくる。主人公が西欧からスペイン植民地下のマニラに帰ってきて目にした市営植物園を西欧にある植物園と重ね合わせてしまい、マニラの植物園を当たり前ものとして見られなくなった感覚を記すために使った言葉である。

アンダーソンは、左翼ナショナリストであり第三世界のリーダーとして振る舞うスカルノがヒトラーをナショナリストとして語る演説を聞いて以来、ユダヤ人虐殺を行った極悪人としてヒトラーを捉える常識的感覚を持たなくなったという。アンダーソンは、このスカルノの演説を西欧の外交官に向けて通訳をしており、その外交官はスカルノを気が狂ったいかさま師としてしか捉えることができなかつたとも書いている。おそらく、この外交官の反応が常識的なのだろう。アンダーソンの場合、比較の視座を持っていたからこそ、比較の亡霊にとらわれ、「ヒトラーの恐るべき所業を平然と眺める」スカルノの目を通してヒトラーを考えることになったのである。そうはいっても、彼はスカルノも含めて国家権力（者）に対しては痛快なまでに批判的で、本書は、そうした比較と批判が絡まり合ったものになっており、それが彼の東南アジア研究に深みを与えている。

本書の第3部は東南アジア各国政治社会を比較した四つの章からなる。選挙を扱った第12章では、シャム（タイ）、フィリピン、インドネシアを比較しており、行政機構の整備が参政権拡大に先行していれば、選挙が多くの有権者を満足させる政策実現をもたらしがちだとする。タイがその例であり、フィリピンとインドネシアは逆であったためにまともな政策が実現していないのだとする。現在のタイをみても、国王に従順な司法や官僚機構という姿が浮かび上がってくるので、この章が雑誌に掲載された1996年時点では、司法も含めた国家機構が本当に有権者を満足させるように機能していたのかを再考する必要があるが、この行政機構整備と参政権拡大の相関は重要な視点である。

ただ、アンダーソン自身は、最後のところで、結局のところ、選挙政治は広範囲にわたる民衆の政治参加を周縁化させてしまうと書いており、やはり、ラディカルな政治参加の実現を希求しているのであろう。だからこそ、次の第13章では、インドネシアとタイにおける（下層の）民衆の政治参加の重要な形態であるラディカリズムを比較検討している。運動とし

ての共産主義ラディカリズム終焉後にも生き続ける思想としてのラディカリズムに着目し、それを表現し続けたタイとインドネシアの作家や研究者を取り上げた。両国で異なる形で終焉を迎えた共産主義ラディカリズムに触れた後、アンダーソンは、共産主義を重要な一部とする直近の過去を見直して、可能ならば回復せねばならないという。ここで回復という時、それは運動としてのラディカリズムの復権をも意味するのだと思うが、アンダーソンは、別に具体的な道筋を描いていない。ラディカリズムもまた具体化・実態化すればするほど、矛盾に満ちてくることを知っていたからかもしれない。

変化（の兆し）を捉える？

あらゆる事象には、始まり、発展・展開、変異、終焉・終末がある。研究者によってどこに研究の力点を置くかは異なる。アンダーソンの場合、ある（変化の）始まり、いや、もっといえば、始まるかもしれない時代や事象、どうなっていくのかわからない時代や事象に一番興味を持っていたような気がする。

第4章と第5章は、ジャワ文化の文脈を存分に踏まえながら、近代化・啓蒙化という大きな社会変化の波が押し寄せる19世紀におけるジャワ人・文学の可能性・優雅・逸脱を描いた作品である。19世紀末、ジャワ王宮最後の宮廷詩人ロンゴワルシトは、支配者たる王による秩序だった幸福の時代が来ることはないと思嘆して死んでいった。20世紀初頭にジャワ人エリート青年たちが発足させたブディ・ウトモという組織は、こうした闇の時代から光の、啓蒙の時代への以降を象徴する、そして、後のナショナリズム運動に繋がるものとして論じられてきた。それに対して、アンダーソンは、ブディ・ウトモの創始者であるストモの「自叙伝」を分析することで、ストモは新しい時代にあって、古くからのジャワの規範を見出していたことを強調し、19世紀末から20世紀初頭の時代変容を闇から

光という単純化した図式で分析することを問題視している。

第7章と第8章ではタイ政治を分析したもので、それぞれ1977年と1988年に書かれた。暴力に着目し、70年代から80年代のタイ政治社会の大きな変容（の始まり）を描いている。1970年代には軍、官僚、王族、華人系ビジネスエリートを中心とする支配者層が、経済成長のもとで新たに台頭した非官僚ブルジョワ、新興ブルジョワを取り込みながら、右翼的イデオロギーを強化して農民や学生運動などの左翼勢力に対する新たな、露骨な暴力を行使していたとする。80年代に入ると、選挙政治が確立していき、左翼勢力が弱体化した結果、新興ブルジョワが国会議員として権力を握り始めて、露骨な暴力は彼ら、あるいは、彼らの代理人の間でのみ行使されるものとなっていった。その意味で、露骨な暴力があろうとも資本主義自体はゆるがなくなつたとする。

第9章から第11章はフィリピンのナショナリズムと政治を扱っている。第11章では、ホセ・リサールの『ノリ・メ・タンヘレ』翻訳版がはらむ体系的かつ意図的歪曲を取り上げている。1887年に出版された初版はタガログ語も交えたスペイン語で書かれており、「社会的にラディカルで偶像破壊的で、諷刺にあふれ、ざつくばらんで、教訓的」で、メスティーツ的世界をもつフィリピン性を描いたものであった。しかし、「フィリピン国家に忠実で有能な役人として」成人生活を過ごしたゲレロが英訳した1960年の『ノリ・メ・タンヘレ』は、こうした原著の魅力が一掃された。アンダーソンは、原著と英訳本を徹底的に比較して、訳者が体系的かつ意図的に行つた歪曲を原文の改竄と現代化など7点にまとめている。そのうえで、こうした歪曲が起きたのは、国家が作り上げていく公定のナショナリズムのロジックが働いたからだとし、（公定）ナショナリズムのもつ悲劇・喜劇を如実に浮かび上がらせている。

最後の第4部において、アンダーソンはナショナリズムの行く末について触れている。そこでは、「国」「故郷」「ネーション」を表すことばに「不

幸な」「悪運の」「呪われた」「不吉な」といった形容詞を並べる状況に慣れるすべを学ぶ必要があると述べた。また、本書の最後は、国民の政府がいかなる罪を犯そうとも、そして時々 of 市民がその罪にいかに加担してしようとも、他ならぬ〈我が国〉がなぜ究極的に善であるのか、(このナショナリズムのもつ) 善性をうまく捨て去ることができるのかと問いかけて終えている。

私の知る限り、アンダーソンはナショナリズムを常にポジティブに見ようとしてきた。そのことからすると、このナショナリズムへの問いかけは彼にとって究極の問いともいえるものであり、彼自身、その回答を示さぬまま、本書を書き終え、そして生涯を閉じた。この問いに答えることは、われわれにとって課題として残っている。

参考・関連文献

- ベネディクト・R. O' G. アンダーソン. 中島成久 (訳). 1995. 『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部. (原著: Benedict R. O' G. Anderson. 1990. *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*. Ithaca and London: Cornell University Press.)
- ベネディクト・アンダーソン. 白石隆・白石さや (訳). 2007. 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山. (原著: Benedict Anderson. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Version. London and New York: Verso.)
- Benedict R. O' G. Anderson. 1972. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-1946*. Ithaca and London: Cornell University Press.

❖本書の著者紹介 (ベネディクト・アンダーソン)

元コーネル大学教授, 専門は政治学, 東南アジア地域研究。インドネシアを主な調査地としながらも、タイやフィリピンの研究も行った。東南アジアを中心としながら、世界史的な視点でナショナリズムの始まりと広がり を論じた『想像の共同体』はナショナリズム研究の古典となっている。

❖執筆者紹介（岡本正明）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。インドネシアを中心とした東南アジアの政治についての研究を行っている。政治と暴力の関係に関する研究を中心としてきたが、最近はデジタル化のもたらす政治社会変容に関心がある。

土屋健治

『カルティニの風景』

めこん, 1991

インドネシア・ナショナリズム研究としての『カルティニの風景』

土屋健治はその研究者人生をインドネシア民族意識の成り立ちを描き出すことに捧げた。土屋のインドネシア・ナショナリズム研究の根底には、ジャワ文化に対する研ぎ澄まされた感受性と深い洞察があった。

土屋の研究には二つの流れがある。一つは思想史研究である。『インドネシア—思想の系譜』（土屋 1994）に収録された初期のスカルノ（Sukarno）論や、キ・ハジャール・デワントロ（Ki Hadjar Dewantara）とスカルノの思想を通底するジャワ文化の概念を探った『インドネシア民族主義研究』（土屋 1982）はその代表的な成果である。もう一つは文化史・社会史研究である。19世紀のオランダ・ジャワ学とロンゴワルシト（R. Ng. Ranggawarsita）との関係性を解き明かした「19世紀ジャワ文化論序説」（土屋 1984）や、ジャワを中心にインドネシアのフロンティア空間の成立を論じた「インド

ネシアの社会統合」(土屋 1988) などの作品群がここに属する。

19 世紀後半から 20 世紀初頭のジャワに生きた女性カルティニ (R. A. Kartini) の心象を探る『カルティニの風景』は、主に後者の流れを汲みつつ、それを前者の流れに繋ぐ作品だといえる。本書で土屋が試みるのは、カルティニを起点として民族と祖国の「風景」の成立とその後の展開を辿りつつ、インドネシアの人々の精神の軌跡を描くことである。

カルティニの生涯

カルティニは 1879 年に中部ジャワ北岸のジュパラに生まれた。父は貴族の家系で郡長や県知事を務めた。生母は父の側室だった。当時のジャワ人女子としては例外的にヨーロッパ人小学校に通い、オランダ語を修得した。しかし、13 歳の時にジャワ貴族の慣習に従って婚前閉居に入り、学校もやめて知事公邸内で一日中を過ごすことになった。

「牢獄に閉じ込められたような」生活でカルティニと世界を繋いだのがオランダ語の書物であり、読書を通じて彼女は「内面の旅」を続けた。1898 年に婚前閉居を終えたカルティニは、翌年にオランダ語雑誌でペンパルを募集し、オランダ人たちとの文通を始めた。その後、オランダ留学断念などの挫折を経て、女性の地位向上活動などに尽力した。1903 年に父が薦める県知事の男性と結婚し、翌年に出産後の産褥熱で 25 年の短い生涯を閉じた。

カルティニが文通相手に送った多数の手紙は、植民地政府教育文化省長官を務めたアベンダノン (J. H. Abendanon) とその妻 (夫妻ともにペンパルだった) の編集を経て、1911 年に『暗黒を超えて光明へ』という書簡集として刊行され、反響を呼んだ。カルティニと文通したオランダ人には、当時の最先端の思想や運動に関わっていた知識人が含まれていた。

近代的個の成立と「風景」の誕生

土屋はカルティニの民族意識の形成の契機として、「風景」の発見という現象に注目する。ワヤン劇にみられるようなジャワの伝統文化では、自然はあくまで伝統的な「決まり文句」(クリシェ)として語られる。それに対して、カルティニの書簡集では、「自然は自然それ自体として、あたかも風景画を描くように描かれる」(p.84)。

風景画を描くように自然を描写することを可能にしたのは、「わたし」(Ik)というオランダ語の主語を獲得したことである。「つまりカルティニは、「わたし」(Ik)というオランダ語を手にすることによって、あたかも画家がキャンパスの上に風景を描くように、自然を描写しているのである。これは、主語を強調しない、それどころかしばしば無人称で状況が描かれるジャワ語やインドネシア語と比べて大きなちがいである」(p.84)。カルティニはオランダ語で書物を読み、文章を綴ることで、「近代的個」としての主体性や内面性を獲得するとともに、自然を「風景」として対象化するようになったのである。

カルティニは手紙の中で風景を「美辞麗句」と「決まり文句」——ワヤン劇で語られる伝統的なクリシェとは異なる写実的なクリシェ——の連なりとして描いた。それによって、カルティニの描く風景は特定の場所や集団に所属しない、誰もが共有できる「ノスタルジアの心象風景」(p.108)として示された。

カルティニが生きた19世紀後半以降の植民地都市では、異文化の混淆を通じて「メスティソ的文化現象」が生まれた。ヨーロッパ人、ユーラシアン、華人、原住民などが文化的に混じりあい、新しい様式の風景画やクロンチョン音楽のような、通俗的で定型化され、特定の地域や集団に帰属しない大衆文化が誕生した。新しい様式の風景画は、「うるわしの東インド」の風景画と総称され、熱気や湿気に満ちた現実とは遮断された「ガラス越しに見られた消毒済みの風景」(p.116)が描かれた。

カルティニの書簡で描写された「ジャワの風景」は、「うるわしの東インド」の風景画と同じように、クリシェに満ちた共有可能な心象だった。土屋によれば、「カルティニは「メスティソ的文化状況」を言語化したという限りにおいて、19世紀末のジャワ社会のすぐれた語り部であり、オランダ語を性能の良いレンズと化してジャワ社会を対象化したという限りにおいて、ジャワ思想史上最初に現れた「近代的個」であり、風景を文化的に規定するという営為を自覚的に示したことにおいて、民族意識の先駆者であった」(p.144)。

「風景」の変遷と「うるわしのインドネシア」の確立

20世紀に入り、オランダは啓蒙的「倫理政策」を導入した。カルティニはオランダの近代的啓蒙主義により〈ヤミ〉から〈ヒカリ〉に達した「近代精神の先駆者」としてオランダ人の賞賛を受けた。他方、インドネシア人ナショナリストや独立後のインドネシア国家はカルティニを「民族覚醒の先駆者」として称えた。1964年には政府によって「国家独立英雄」の称号を与えられ、4月21日の生誕日は「カルティニの日」として祝われている。

「メスティソ的文化現象」は20世紀以降に新たな性格を帯びるようになった。クロンチョン音楽は、作り手や聞き手が主にインドネシア人によって占められるようになり、インドネシアの「国民歌謡」と化していった。「うるわしの東インド」の風景画も画家と顧客がインドネシア人中心となり、「うるわしのインドネシア」の風景画へと変化していった。

1991年現在の「国家の風景」にみられるのは、市場経済や国家の政策を通じた「うるわしのインドネシア」の氾濫である。「うるわしのインドネシア」のイメージは商品、学校教育、観光、博物館・記念碑・英雄墓地などを通じて社会の各層に行き渡った。カルティニを起源とする「うるわしのインドネシア」は、「国民国家の至高性と永遠性を証する心象風景と

なった」(p.258)。しかし、「うるわしのインドネシア」と繋がりつつも別の方向に向かう力も存在する。例えば、かなしみにとざされた風景を歌った歌手エビート (Ebiet G. Ade) である。彼のように、カルティニと同じく「いま目にしている時代の風景を描き上げる人々」(p.268) が今後も誕生する可能性を示唆して、土屋は「風景」をめぐる旅を終える。

研究対象をどう書くか

土屋は本書の「あとがき」の部分で、本書の構想から執筆の開始までに時間を要した理由の一つとして、「カルティニについてどういう書き方をしたよいかを決めかねていた」(p.272) ことを明かしたうえで、以下のように述懐している。

そして、私にとってのインドネシアを、「私」という主語を用いて書こう、それが当面「カルティニの風景」について記すもっとも自然な方法ではあるまいか、そう決めた時に、ようやく最初の一行を書き始めることができた。(p.272)

土屋が「私」という主語を用いて書くことにはどのような意味があるのか。まず、「私」という主語を用いることで、土屋は「カルティニの風景」というテーマを着想するに至った個人的な契機を語るができるようになった。「風景の中へ」と題する最初の章で、土屋はインドネシア留学時の体験に触れ、当時の下宿の応接室に飾られていた2枚の絵、とりわけ湖と山が描かれた風景画が本書の問題意識の発端だったことを明かしている。

しかし、より重要なのは、「私」という主語を用いることで、土屋がカルティニのまなざしに近づけたことだろう。「わたし」(Ik) という視点から映し出されたカルティニの心象風景に迫るために、土屋自身もまた「私」という主語を必要としていたのではないか。

「私」という主語を得た土屋は、「土屋健治の風景」とでもいうべき印象的な風景の描写を通じて、読者を本書の舞台であるジャワへと誘い出す。以下の一節は好例だろう。

昼は限なく明るい日差しがまっすぐに降り注ぐが、夜は深く濃い闇に満たされる。昼は光の粒子、夜は闇の粒子が天上から降り注いで空間をあまねく満たしている。そして、このようなジャワの気配は、夜の訪れとともにことさら緊密に立ち昇ってくる。 (p.23)

「土屋健治の風景」を下地として「カルティニの風景」が語られることで、読者もジャワにおける「風景」の誕生をより身近な感覚で追体験できる。これは本書の魅力の一つである。

しかし、こうした書き方は、「カルティニの風景」が「土屋健治の風景」の中に包摂されてしまう危険性も秘めている。「カルティニは土屋の描いたナショナリズム誕生の風景の一部と化した」（小林 2018: 61）のだとすれば、民族誕生の物語に収まりきれないカルティニのほかの側面が見落とされるおそれもある。そうした問題意識から、土屋の研究に触発されつつも、「民族覚醒の先駆者」に回収されない新たなカルティニ像を模索する試みもなされている（富永 2019）。

土屋が「私」という主語を用いて書いたことの当否をここで問うつもりはない。むしろ、より重要なのは、土屋が「私」という主語を用いて書こうと決めるまで、長い時間をかけて考えと思いを巡らせたことである。研究対象にどう向き合い、研究対象をどう書くかを徹底的に考え抜くこの真摯な姿勢にこそ、土屋の地域研究者としての真髓があるように思える。土屋の作品がひとの心を打つ理由の一つはここにあるのではないだろうか。

参考・関連文献

- 小林寧子. 2018. 「国家・英雄・ジェンダー—カルティニ像の変遷」『歴史の生成—叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』小泉順子（編）. 京都大学学術出版会.
- [白石隆. 1996. 「インドネシアの近代における『わたし』—カルティニの ik とスワルディの saya」『東南アジア研究』34 \(1\).](#)
- [土屋健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究—タマン・シスワの成立と展開』創文社.](#)
- . 1984. 「19世紀ジャワ文化論序説—ジャワ学とロンゴワルシトの時代」『東南アジアの政治と文化』土屋健治・白石隆（編）. 東京大学出版会.
- . 1988. 「インドネシアの社会統一フロンティア空間についての覚え書き」『アジアにおける国民統合—歴史・文化・国際関係』平野健一郎ほか. 東京大学出版会.
- . 1994. 『インドネシア—思想の系譜』勁草書房.
- 富永泰代. 2019. 『小さな学校—カルティニによるオランダ語書簡集研究』京都大学学術出版会.
- ベネディクト・アンダーソン. 白石隆・白石さや（訳）. 2007. 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.（原著：Benedict Anderson. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Edition. London and New York: Verso.）

❖本書の著者紹介（土屋健治）

元京都大学東南アジア研究センター教授。東南アジア思想史論、インドネシア地域研究。本書以外のおもな著作に『インドネシア民族主義研究—タマン・シスワの成立と展開』、『インドネシア—思想の系譜』など。

❖執筆者紹介（左右田直規）

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。専門はマレーシア政治社会史。個人的に感銘を受けた本を一冊挙げるとすれば、阿部謹也。2007. 『自分のなかに歴史をよむ』（ちくま文庫）筑摩書房。研究とは何か、異文化や過去を学ぶ意味は何なのかを根源的に考えさせてくれる著作。もともとは10代の若者向けに書かれた本だが、何歳になっても味わい深い。

社会

ジェームズ・C・スコット

『モラル・エコノミー ——東南アジアの農民叛乱と生存維持』

高橋彰（訳），勁草書房，1999

James C. Scott. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.

モラル・エコノミーとは何か

モラル・エコノミーという用語を最初に用いたのは，ジェームズ・C・スコット（James C. Scott）ではない。イギリス史家のE・P・トムスン（E. P. Thompson）である。トムスンが主著「18世紀イングランド民衆のモラル・エコノミー」（1971）で扱ったのは，産業革命の黎明期，穀物価格が大きく変動し，食糧が欠乏する中，度々勃発していたロンドンの民衆暴動であった。暴動を理解するうえでトムスは，経済学的な数量分析ではなく，社会人類学的な考察の必要性を説く。ここでトムスンが述べるモラル・エコノミーとは，コミュニティの中で守られ，穀物価格を抑制し，食糧の公平な分配を促す，権利や慣習，義務，規範などに関わるさまざまな伝統的な考えである。それらがかつて政府や，穀物の生産・流通・加工・販売に関わる農家，穀物商人，粉挽屋，パン屋らによって守られてい

た。だが、こうした業種に携わる人々は、18世紀に入り市場経済が拡大すると、コミュニティから離脱して自己利益を追求し始めた。自由放任経済を擁護する政府も、市場への介入に消極的になった。こうして、民衆の生存をかつて支えた、コミュニティのコンセンサスとしてのモーラル・エコノミーが遵守されなくなってゆく。この遵守を求め、民衆は突発的に暴動を起こしていたとトムソンは論じたのである（Thompson 1971）。

スコットの学術的な貢献は、トムソンのモーラル・エコノミーという概念を、20世紀東南アジアの農民叛乱に援用し、議論を深化させ、論争を巻き起こしたことである。スコットによれば、東南アジアの農民（peasant）は、平均収益を極大化するよりも、災害に見舞われる可能性を極小化することを選好する、安全第一主義者である。つまり、生存の危機を極小化するために、高収量が見込まれる新しい稲種や耕作技術を導入するよりも、収量が低かろうとも、災害に強い在来種や伝統農業に重きを置くような危険回避者であるという。前述のトムソンの民衆への見方と同様、このスコットの農民に対するまなざしは、社会から自立して自己利益の追求を選好する、新古典派経済学の前提とする「経済人（*Homo Economics*）」という人間像とは正反対の立場であった。

このような人間観に基づき、スコットは、伝統的な東南アジア村落には、互酬的な相互扶助の規範や村落共有田の分配、不作でも農民の最低限の取り分を保障する分益小作制など、農民の生存倫理（*subsistence ethic*）、すなわちモーラル・エコノミーが存在したと述べる。農民の支払う地代や小作料に依存していた国家や地主も、互酬的な規範を遵守し、農民を庇護する義務を負ったという。このような伝統的な東南アジア村落の姿としてスコットが念頭に置いたのは、フランスの人文地理学者ピエール・グルー『トンキン・デルタの農民』（1936）に描かれたベトナム北部紅河デルタ村落の強固な結束であり、また文化人類学者クリフォード・ギアーツ『インボリューション』（1963）が論じたインドネシアのジャワ村落における「貧

困の共有」という慣行であった。

スコットによれば、このような東南アジア村落は西欧諸国によって植民地化されて以降、資本主義的な世界市場に統合されてゆく。土地や生産物の商品化、フロンティアの開拓が進み、農村人口が急激に増加するとともに、少数の大地主が多数の小作農や農業賃労働者を支配する状況が各地で生まれた。市場経済に適応し、相対的に農民に対する権力を強めた地主は、収益増大を図って定額の地代や小作料を農民に課すようになった。さらにこうした地主の財を植民地国家は保護するなど、かつての伝統村落において農民の生存を支えた倫理は遵守されなくなったという。

こうした変化は、とくにベトナム南部や下ビルマのように、植民地化以降に開拓が進んで輸出米生産地となったフロンティア地帯で顕著であったとスコットは指摘する。世界恐慌の影響が1930年代に東南アジアに直撃すると、地主や国家の取り立てがさらに厳しくなり、小作農から賃労働者に転落する農民が増加した。危機に陥った農民は、守られなくなった生存倫理を取り戻すべく、地主や国家に対し勝ち目のない絶望的な叛乱を起こすようになった。こうした農民叛乱が、表面的には共産主義運動や、ベトナムのカオダイ教、ホアハオ教、ビルマのサヤーサンの叛乱といった新宗教による千年王国的運動の形態をとったと、スコットは指摘する。

モーラル・エコノミー論争とベトナム戦争

21世紀の読者からすると、叛乱というテーマは、古めかしい問題に思えるかもしれない。スコットが1976年に原著 *The Moral Economy of the Peasant* を刊行した当時は、多くの人文社会学者が第三世界の民族解放闘争に関心を払っていた時代であった。中でも、東南アジアは、20世紀後半にアメリカに大きな衝撃を与えたベトナム戦争の渦中にあり、米軍と戦う東南アジアの農民ゲリラは、多くの人文社会学者に驚きと共感を持って受け止められていた。スコット自身、後年に出版された別著のまえ

がきで、『モーラル・エコノミー』出版当時、ベトナム戦争への関心や民族解放闘争に関する学術的なロマンスによって、農民叛乱が過剰に注目されていたと振り返っている (Scott 1985: xv)。とりわけ 1975 年、米軍が多大な犠牲を払って駐留・支援した南ベトナム国家が崩壊したことで戦争が終結し、翌年には米兵とゲリラ戦を展開した共産党が南北ベトナムを統一するという衝撃的な出来事が起こった。この変化を目の当たりにしたアメリカでは、東南アジアの農民叛乱や革命運動の核となった農民の行動原理をめぐる学術的な関心が、著しく高まっていたといえよう。このような時代状況の中で著されたのが、本書であった。

ところで、スコットの展開したラディカルな議論は、とくに新古典派経済学の影響を受けた研究者から反発を招くことになった。その急先鋒にいたのが、ベトナム戦争中に南ベトナムに滞在して政治分析を行ったサミュエル・ポプキン (Samuel L. Popkin) である。ポプキンは、1979 年に『合理的農民』を刊行し、植民地化以前から農民は、生存危機の有無にかかわらず、個人的利益の増大を選好してきたという、スコットとは正反対の立場であるポリティカル・エコノミー論を展開した。

ポプキンによれば、伝統的なベトナム村落において、規範は農民の生存保障になっていなかった。有力者は自己利益を追求して職権を濫用し、一般農民との間で常に不平等が存在していた。伝統村落は階層化され、村落のメンバーシップを持つ内籍民と、それを持たない、他地域からの流入者である外籍民がいた。飢餓が生じた際に内籍民は、権益と収益の少ない外籍民を切り捨てることで自身の生存を確保した。こうした理由により、自己利益を選好する農民は、村落規模の互酬的な相互扶助や生存保障に投資、依存するよりも、子どもへの援助や貯蓄を通して得られる個人的な福利を選好する。そして叛乱や革命など、公共投資としての共同行動をリスクの高いものとして避ける。つまり、共同行動に参加した場合、何もせず共同行動の利益に「ただ乗り」しようとする者が出現し、不利益を被ること

を恐れる。したがって、優れたリーダーシップを持った農村外部の指導者が「ただ乗り」を抑止し、共同行動への参加が個人の利益に適うことを示して初めて、農民は共同行動に参加する動機を持つに至るとする。ベトナム共産主義者が主導した民族解放闘争や農業集団化は、共同行動へ農民を動員することにとくに成功した好事例であるとする (Popkin 1979)。

スコットとポプキンの相容れない見解は、後に「モーラル・エコノミー論争」、ないしはその主要な論者たちの名をとって「スコット・ポプキン論争」と呼ばれ、さまざまな特集が組まれた (末尾の参考・関連文献を参照)。この論争は、単純化していえば、人間を、文化や社会、生態環境に埋め込まれた存在と理解するのか、あるいは、そうした周囲の環境から自立し、自己調整型の経済システムの中で合理的な選択を行う「経済人」と捉えるのかという、人間観の違いに由来する。

本書以降の著作

スコットは、ポプキンの批判に反論こそしなかったものの、叛乱や革命のような共同行動の形態にはならない不満の示し方について、そしてこうした不満の背景にも倫理の問題が潜在していることについて、後の研究で明らかにしてゆく。モーラル・エコノミー論争で争点となった個人／コミュニティの利益をめぐる不毛な議論ではなく、農民個々人の行動と規範意識に焦点を合わせるようになった。その成果が、著書『弱者の武器』(*Weapons of the Weak*, 1985) である。

同著は、『モーラル・エコノミー』で描かれた伝統村落の姿とは大きく様相が異なる、市場経済化の進んだマレーシア・ケダ州の農村でスコットが行った民族誌的調査に基づいており、農村のパトロン・クライアント (親分子分) 関係の変化に焦点が当てられる。政府主導の農業改革「緑の革命」の恩恵にあずかり、コンバイン (稲刈り機) を導入するなどして貧困層の労働に依存しなくなった富裕層と、その結果仕事を失い富裕層から

貸付けや施しを得られなくなった貧困層の間で、資源や倫理をめぐる日常的なせめぎあいが生じていた。農村の支配者である富裕層は、かつて貧困層への支配を正当化するために村落の規範を利用したが、その規範を盾に、従属的な立場である貧困層は、陰口を叩いたり仕事を怠けたり、盗みを働くなどした。日常の中で非組織的に行われるこうした抵抗は、規範を守らない富裕層を批判し、かつて規範から得られていた利益の確保を求めるための行動であった。スコットは支配者が新たに敷こうとする規範をめぐる、従属的な立場の人々が従来の規範を参照しながら、抵抗や応諾などの選択を意識的に取っていると論じた。

この主張は、労働者や農民が支配者に「搾取されている」状況を正確に認識していないとする、マルクス主義者の虚偽意識論を批判したものであった。実は『モーラル・エコノミー』の7章においても、叛乱は報復や死の危険をとまなうため、歴史上の農民は、より危険の少ない抗議行動として農作物、家畜の窃盗や持ち逃げ、あるいは嘲笑、歌、伝承などを通じて、支配者に不満を示していたことが触れられていた。スコットは、叛乱に加わらなくとも農民は支配者による規範の不遵守を見破っており、支配者の社会秩序を宿命的に受容しているわけではないことを強調していたのである。

前近代であれ近代であれ、人間個々人は、所属する社会の中に埋め込まれた存在であると同時に、その社会が変化によって揺らぎ始めた時には、状況を調整したり、時にそこから離脱したりする。スコットのこうした思想は、後の一連の著作でさらに展開されてゆく。『国家のように見てみる』(Seeing Like a State, 1998)では、20世紀に科学技術と同様に社会は合理的に設計できるとするハイモダニズムの思想が、社会を単一化(simplification)し「読みやすく(legible)」しようとする国家事業へと結びついていったこと、そしてこうした諸計画がいずれも、多様で複雑に入り組んだ土着の社会や生態環境の改変に失敗したことを論じた。さらに『ゾミア』(2009)

では、前近代、東南アジア、中国、インドにまたがる山岳地帯が無国家空間であったとし、奴隷、徴兵、徴税、戦争といった平地の国家建設から距離を置こうとする人々の避難地域であったとする。『モーラル・エコノミー』から派生したスコットのラディカルな議論は、その評価をめぐって賛否両論こそあるものの、現在に至るまで論争を巻き起こし続けている。

参考・関連文献

- ジェームズ・C・スコット、佐藤仁（監訳）、2013、『ゾミア—脱国家の世界史』みすず書房。（原著：Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.）
- 加納啓良、1994。「農民革命の政治社会学—東南アジアからの試論」『世界政治の構造変動 3—発展』坂本義和（編）、岩波書店。
- クリフォード・ギアーツ、池本幸生（訳）、2001、『インボリューション—内に向かう発展』NTT出版。（原著：Clifford Geertz. 1963. *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.）
- 白石昌也、1980。「ジェームズ・スコット『農民のモーラル・エコノミー』に関する覚書」『アジア研究』26（4）。
- 、1984。「東南アジア農村社会論の最近の動向をめぐって—モーラル・エコノミー論とポリティカル・エコノミー論を中心に」『東洋文化』64。
- 高田洋子、1985。「スコット・ポプキン論争をめぐって」『東南アジア—歴史と文化』14。
- 原洋之介、1983。「東南アジア農村社会論—地域研究と経済理論」『東洋文化』63。
- 、1985、『クリフォード・ギアーツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』リポート。
- ピエール・グルー、村野勉（訳）、2014、『トンキン・デルタの農民—人文地理学的研究』丸善プラネット。（原著：Pierre Gourou. 1936. *Les paysans du Delta tonkinois: étude de géographie humaine*. Paris: École des Études française Extrême Orient.）
- Keyes, F. Charles. 1983. "Peasant Strategies in Asian Societies: Moral and Rational Economic Approaches—A Symposium: Introduction." *Journal of Asian Studies*. 42(4): 753-768.
- Popkin, Samuel L. 1979. *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam*. Berkeley: University of California Press.
- Scott, James C. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.
- 、1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.

- . 1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. New Haven: Yale University Press.
- Sivaramakrishnan, K. 2005. "Introduction to Moral Economies, State Spaces, and Categorical Violence." *American Anthropologist*. 107(3): 321-330.
- Thompson, E. P. 1971. "The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century." *Past & Present*. 50: 76-136.

❖本書の著者紹介（ジェームズ・C・スコット）

1936年アメリカニュージャージー州マウントホリー生まれ、イエール大学政治学・人類学名誉教授。専門は政治学、人類学。本書以外で日本語に翻訳されている著書は、下記のとおり。

2013.『ソミア―脱国家の世界史』佐藤仁（監訳）。みすず書房。

2017.『実践 日々のアナキズム―世界に抗う土着の秩序の作り方』清水展ほか（訳）。岩波書店。

2019.『反穀物の人類史―国家誕生のディープヒストリー』立木勝（訳）。みすず書房。

❖執筆者紹介（下條尚志）

神戸大学大学院国際文化学研究科准教授。専門は歴史人類学、東南アジア地域研究。学部生のときに感銘を受けた本は、カルロ・ギンズブルグ。杉山光信（訳）。2003.『チーズとうじ虫―16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房。

E・R・リーチ

『高地ビルマの政治体系』

関本照夫（訳）、弘文堂、1995

Edmund R. Leach. 1954. *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: G. Bell and Sons.

孤島の均衡理論からの跳躍

思わぬ偶然が民族誌の名作を生み出す場合がある。第一次世界大戦の勃発がマリノフスキー（B. Malinowski）に長期のフィールド生活を強い、その経験をもとに書かれた『西太平洋の遠洋航海者』が長期参与観察に基づく民族誌のさきがけになったのはその典型であるが、本書もまた、それとよく似た偶然によって生まれた名作といえる。

本書の著者リーチ（E.R. Leach）は、当初はマリノフスキーの指導下に、英領ビルマの北部山地（カチン山地）で1年間の村落調査を行うべく1939年に渡航したのだが、ビルマに到着した直後に第二次世界大戦が勃発したため、現地で英軍に動員されることになった。日本軍によるビルマ侵攻以後は、カチン非正規部隊を組織する任務に携わってカチン山地の各地を転戦し、その過程でフィールドノートを紛失するという代価を伴いながら、

1946年によく除隊している。本書は、そこで失われたフィールドノートを除隊後の歴史文献の渉獵によって補うことで完成したものである。

こうした特異な経験が、従来とは全く異なるスタイルの民族誌を生み出すことになった。それまで主流となっていた民族誌は、のちに「孤島の民族誌」と揶揄されるような、任意の小規模地域社会を切り取り、そこを外界から隔絶された自己完結的な小宇宙とみなし、そこでの均衡維持のメカニズムを共時的に描きだす、というスタイルを特徴としていた。またそこでは、特定の村落から得られた情報をもってその民族全体の理解に拡張することを暗裏裏に前提としていた。それに対しリーチは、カチン、シャンなどの複数民族にまたがる現地調査を、カチン山地全域において行い、さらにそれを地域社会の歴史的な変遷過程に位置づける、というアプローチを選択した。これは上記のように、フィールド調査中に戦争が勃発して軍に動員され、フィールドノートの紛失と引き換えに幅広い視野を手に入れたという彼の経験が、結果的に前例のないスケールに基づく民族誌の誕生を可能にしたものといえる。

共振する山地と平地

本書の舞台となるのは、ビルマ（現ミャンマー）北部山地（カチン山地）の、主にカチンと総称される焼畑耕作民の居住地域である。カチンと呼ばれる人々は実際には非常に雑多な言語集団を含んでおり、その中核はチベット・ビルマ語系のジンポー語集団であるが、そのほかにアツィ語、マル語などの話者も含まれている。カチン山地の河谷には、タイ語系のシャンと呼ばれる水稻耕作民も居住している。シャンは盆地に小規模な王国を有する仏教徒であり、周辺山地のカチンたちは、多くの場合このシャン国家に名目上服属し、またシャンを模倣しようとする傾向を見せる。カチンによるシャンの模倣は、シャンへの文化的・政治的同化（「シャンになる」）を時に帰結する。これらの事例から著者は、言語集団を民族集団とみなし、

それを排他的な分析対象とする研究傾向への警鐘を発している。カチンが「シャンになる」という事例にみられるように、人々が使用言語や民族帰属を変更することは、この地域では頻繁にみられるのであり、しかもカチンという範疇自体が複数の言語集団から構成されていて、なおかつその中でも優勢言語への同化が常に認められるためである。

カチン社会の最も一般的な政体はグムサと呼ばれる。カチン社会においては、末息子相続を伴う父系単系出自によって親族集団（リニージ）が組織され、それぞれのリニージは縁組を通じて階層的に配置される。すなわち、妻の与え手（マユ）リニージが妻の受け手（ダマ）リニージに対して優位に立ち、後者が前者に対して服従の義務を負うというかたちでの階層化である。グムサ体系においては、リニージの階層化はさらに、首長リニージと平民リニージに大別される。グムサ体系の理念型のもとでは、首長リニージの正統な後継者が村落ないし村落群を支配するという小型の首長国が山地に無数に存在し、それぞれの首長は互いにマユ・ダマ間の階層秩序によって結びつけられていることになる。

ただしこのシステムは、均衡体系にはほど遠い不安定なものであるとリーチは指摘する。グムサの階層秩序は理論上はきわめて明確であるが、現実には常に多くの論争を生み出すことになる。なぜならば、男女の同居生活は婚資の支払いをもって初めて正規の結婚とみなされるのだが、しばしば婚資の支払いは未完了の状態に置かれ、その間に生まれた子どもたちは厳密には私生児の扱いを受ける。つまりある人物が首長の末息子の家系であることを主張するとして、そのライバルたちは、数代前の祖先の婚姻の成否や子どもの地位に疑義を呈することで、容易にその主張を無効化できるのである。

実はグムサ体系というのは、そもそも当事者にとってすら理想の姿ではない、とリーチは指摘する。人々が理想とする政体のモデルはシャン型かグムラオ型（後出）であり、グムサというのは常に妥協の産物として成立

する。それゆえにグムサ体系は、シャン型とグムラオ型をそれぞれ志向する人々によって引き裂かれ、不安定化する宿命にある。

ではシャン型、グムラオ型とは何か。シャン型というのは、盆地のシャンが体现する専制王国であり、グムラオ型というのは平等主義的な村落共和国である。上述のように、カチンの政体は一般にシャンを模倣しようとする。つまりグムサ型の首長国というのは、あくまでシャンの専制王国の不完全な模倣だということになる。しかしシャン国家の完全な模倣は困難である。グムサ体系の階層化の論理はあくまで親族組織の婚姻同盟によって成り立っているのに対し、シャン国家のそれは、親族関係ではなく、王族と臣民との断絶にこそ基礎を置く。そのため、カチンのグムサ首長がシャンの王のようにふるまうことは、婚姻同盟の相手であった人々を使用人の地位に格下げする効果を伴うのであり、それがグムラオ派の反乱に口実を提供することになる。しかしグムラオもまた、グムサへの揺り戻しの契機を含んでいる。マユとダマの非対称性こそがカチンの社会組織の根本にある以上は、平等主義は貫徹しえず、婚姻同盟は階層化し、村落共和国はミニ首長国へと逆戻りしていく。

ここから描きだされるのは、シャン型とグムラオ型の間を振り子のように揺れ動くカチン社会の動態である。このような動態を生み出す要因としてリーチが指摘するのが、神話を含む儀礼言語の本質的な曖昧さである。実際にカチン山地においては、シャン型、グムサ型、グムラオ型といった政体の類型をまたいで、同一の神話モチーフや儀礼表現が共有されている。儀礼言語を構成する一つひとつの要素は複数の解釈に開かれており、シャン型、グムラオ型のいずれの理念からも自派に都合のよい解釈を引き出すことができるのであり、そのことが、基本的な儀礼言語の変更を伴うことなく、各アクターの同床異夢がもたらす政体の不安定化や変動をもたらしているとされている。

東南アジア国家と山地社会

名著と呼ばれる本というのは、読む人の立場に応じてさまざまなストーリーを発展させることのできる本であることが多い。本書もまたその意味で、名著と呼ばれるにふさわしい古典である。ここでは紙幅の関係から、そうしたさまざまなストーリーの中から、東南アジア山地社会論に関する発展可能性を取り上げてみたい。

ここであわせて読んでみたいのが、スコット (J. Scott) の『ゾミア』である。スコットは、東南アジア大陸部山地焼畑民の社会が集住による中央集権化とは正反対のベクトルによって動かされていることに着目し、山地社会の諸制度が国家による統治から逃れることを主たる目的として編成されていると主張する。ここにおいて山地社会は、国家からの逃亡者たちの空間として位置づけられることになる。

このスコットの主張を経由させた後で改めて本書を読み返せば、いくつかのことに気づく。本書においても、焼畑民の小集落への分解傾向（焼畑は広大な休閑林を必要とするため人口密度を低く保つことが望ましい）と、権力の集中への指向（人力の動員のためには人口の集住が望ましい）とのジレンマが、カチンのグムサ社会に根本的な不安定さを与えていると指摘されている。盆地の水稲耕作に基礎を置くシャンは、定住度と人口密度の高い社会を維持することができるが、カチンが山地の焼畑地域でそれを模倣しようとする、分散傾向が強く移動性の高い人々を引き留めねばならず、そのためには親族集団間の婚姻同盟に基づく互酬関係を維持することが不可欠になるが、まさにそれゆえに、シャンのような専制王権の確立が困難になるのである。

つまり山地社会における集住と分散という命題を、スコットは平地国家からの逃避という文脈で理解したのに対し、リーチは平地国家への憧憬と模倣の文脈で説明する。見えている景色は2人ともほぼ同じである。スコットは、山地社会の住人が、国家の桎梏を嫌って平地から逃亡してきた

人たちによって構成されていると主張する。これを本書冒頭の「シャンになる」という逸話と組み合わせて考えてみると、平地民が「山地民になる」遠心的力学と、山地民が「シャンになる」求心的力学が相補的に作用している点こそが、東南アジア大陸部山地社会の面白さを規定していることに気づかされるのである。

参考・関連文献

- アダム・クーパー。鈴木清史（訳）。2008。『人類学の歴史—人類学と人類学者』明石書店。（原著：Kuper, Adam. 1996. *Anthropology and Anthropologists*. London: Routledge.）
- B・マリノフスキ。増田義郎（訳）。2010。『西太平洋の遠洋航海者』（講談社学術文庫）講談社。（原著：Malinowski, Bronislaw. 1922. *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: Routledge & Kegan Paul.）
- ジェームス・C・スコット。佐藤仁（監訳）。2013。『ゾミア—脱国家の世界史』みすず書房。（原著：Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.）
- 関本照夫。1987。「東南アジア的王権の構造」『現代の社会人類学 3—国家と文明への過程』伊藤亜人ほか（編）。東京大学出版会。

❖本書の著者紹介（エドモンド・リーチ）

英国に生まれ、ケンブリッジ大学で数学と工学を修めたのちに人類学に転じる。ビルマ（現ミャンマー）、スリランカなどで現地調査を行う。本書のほか『人類学再考』『社会人類学案内』『聖書の構造分析』など著書多数。

❖執筆者紹介（片岡 樹）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科教授。タイ国を中心に、東南アジアの山地少数民族や華僑華人などの宗教を主に研究している。学部時代に本書の和訳が刊行されてむさぼり読んだことが記憶に新しい。感銘を受けた本は近藤紘一。1985。『サイゴンのいちばん長い日』（文春文庫）。

石井米雄

『タイ仏教入門』

めこん, 1991

東南アジアの宗教社会学への招待

本の内容に入る前に、読者の皆さんに向けて質問が一つ。

「社会」を理解するため、宗教に目を向ける理由は何だと思えますか？

きっと、次のような答えが出るだろう。「東南アジアの人々は信仰心が強いから」。「宗教施設に溢れんばかりの人々が集まっているから」。「日々の生活で儀礼行為が頻繁に見られるから」。つまり、生きている宗教の世界がそこにあるからということになるだろう。

社会の近代化が進み、政教分離という政策の下でパブリックな場面から宗教が遠ざけられた現代の日本からみれば、いま東南アジアと呼ばれる地域ならばどこでも、精霊信仰、祖先崇拜、仏教、イスラーム、キリスト教、その他諸々の宗教が人々の生活の中心にあるような状況を観察できるだろう。それならば、その社会を理解しようとする際に宗教を考えることは必

然である。対象とする人の行為を理解するには、彼／彼女らの道徳や価値観が、いかに宗教に影響されているのかを解き明かす必要がある。そのような関心から宗教の内容を知るには、聖典に書かれた教えを学び、それがいかに人々によって理解されているのかを確かめる必要がある。

しかし、それだけではない。人々の行為がいかに宗教（の理念や価値）に規定されているのかを問うのではなく、その社会が、いかにしてその宗教を存続させているのかと考えることもできる。便宜上ここでは、宗教という言葉の意味内容から、身体や自然の生命力やその循環、または靈的存在への信仰などの部分はいったん除外しておきたい。代わりに、いわゆる世界宗教を議論の中心におく。東南アジアでは現在、仏教、イスラーム、キリスト教が、多くの人々によって信仰されている。しかしそれらは、アラブ世界やインドに起源をもつ外来のものだ。数百年以上の昔に、今日東南アジアと呼ばれるようになった地域に伝えられ、信仰が続いてきたものだ。では、東南アジアの各地の社会は、いかにしてその外来の宗教を支えてきたのか。それらの宗教は、どのような社会的制度の下で、その活動を存続させてきたのか。これは、宗教社会学という学問領域の中心となる問いである。

東南アジアの仏教

仏教は、今から2500年以上前に、ガウタマ・シッダールタという名前を授けられた北インドの釈迦族の王子が、老病死という苦からの解放を求めて修行者となり、その後自らが悟った教えを衆生に説いたことを契機にインドで始まった。ブッダと呼ばれるその創始者は、45年のあいだ教えを説き、80歳でこの世を去った。その教えは弟子たちによって継承されるが、100年ほど経った後、一つの対立が生じた。ブッダが生前に示した教えの規則を保守的な立場から変わらず遵守するよう主張した弟子たちと、進歩的な立場から社会の時流に合った新しい解釈も許容すべきと考えた弟

子たちの対立である。それ以後、仏教は大きく二つの伝統に分かれた。今日のスリランカや東南アジアの人々が信仰する仏教は、保守的な立場の伝統に従うもので、ブッダが生きた時代の修行を変わずに行うことを特徴とする。他方、東アジアなどに広まった仏教は、戦乱や災害、貧窮や病苦に揺れ動く社会を生きてきた各地・各時代の人々に具体的な救いの道を示すため、さまざまな指導者によりブッダの教えに拡大解釈が加えられ、教理の多様な発展形を示すようになったものである。

しかし、その東南アジアの仏教が、ブッダの時代の原始の仏教の形を今も維持していると評価されることは不思議ではないか。ブッダがその教えを興したインドの歴史世界と、現代の東南アジアとでは、社会の状況が大きく違うはずだからである。なぜ、そのような形の仏教が、タイの地で、はるか昔と変わらない特徴を維持したまま存続できているのだろうか。

タイには「二つの仏教」がある

本書は、タイの仏教を、タイ人の視点に立って考え、タイという国の社会に内在する論理から理解しようと試みる。あとがきを含めてボリュームは200頁に満たない。使われている言葉は、一部の仏教用語を除けば非常に平易である。

本書は、まったく異なった原理をもつ二重の構造をタイの仏教の中に見出す。タイには出家者の仏教と、在家者の仏教という「二つの仏教」があると述べるのである。その「二つの仏教」が組み合わさった構造的特徴を理解することが、保守的な古い形の仏教がこれまでタイ社会に息づいてきた理由を解き明かす鍵であると著者はいう。

上座仏教の最大の特徴は、戒律に基づく出家と在家の厳密な区別である。戒律とは、ブッダが定めた修行上のルールで、「○○をしてはいけない」という禁止条項の形で示される。現世の生活を棄てて、寺院に住み、悟りを目指して修行に集中する出家者の生活は227もの「してはいけない」

ルールで縛られている。悟りに至るにはそれが必要だとブッダが定めたからである。2500年以上前に作られた戒律をただただ守り、実践し、超俗的な出家生活を送る僧侶たち。こうした出家者に着目するならば、その仏教を、ブッダの時代から変化しない原始的なものとするのも無理はない。しかし、人間として生をこの世に受けた存在のうち、そのような修行の道に進むことができるのは極めて少数である。では、その道に進めなかった者はどうすればよいのか。

その疑問は問題とならない、と筆者は述べる。世俗に留まる者たち（在家者）は、出家の道に進めなかったという無念や劣等感と無縁の、もう一つの仏教を生きているからである。そこで人々は、功德という一種の精神財が幸せを保証すると考える。ブッダの時代の原始的な形を保持すると評される出家者の仏教は、功德を核とする在家者の仏教によって支えられているのである。功德の効果は、来世を待たず、現世から発現する。功德は人々が善きものとするさまざまな行為から生じ、当人と共に、他者の幸せも保証する。ブッダが定めた修行の道を進む出家者を支えるさまざまな行為——出家者となること、その住まいを提供すること、それに食べ物を寄進すること等々——は、そのような功德を生み出す代表的な行いである。

本書はさらに、「二つの仏教」からなるタイの仏教が、19世紀以降の社会の近代化の中で国家によりどのような制度を与えられたかという点を、現地語の歴史資料をもとに詳しく説明する。そのタイ仏教の制度化の部分は、本書を手にとって実際に読んでほしい。そうして、外来の宗教である仏教が、タイ社会に根付き、今日まで息づいている不思議についての、著者による見事な謎解きをぜひ目撃してほしい。

地域研究の古典としての価値

本書は1991年の出版だが、同じ著者の『小乗仏教—戒律の救い』（1969年、淡交社）と内容はほぼ同じである。つまり、執筆から半世紀を越えて

読み継がれていることになる。半世紀以上前の出版であるため、当然ながら、現地の情報としては古くなっている部分がある。しかし、「二つの仏教」という分析視角は、タイ社会だけでなく、カンボジアやラオス、ミャンマーなどの地域の社会と人々の暮らしを理解するうえで、現在も揺るぎない説得力をもつ。

対象とする現地の人々に寄り添う姿勢は、地域研究の定石であり、またその精粹でもある。本書の著者の石井米雄は、20世紀半ば以降に始まった日本の東南アジア研究の「父」である。1953年に東京外国語大学でシャム語（タイ語）を学び始めてから、一貫してタイ社会に関心を持ち続けた。大学を中退して外務省に入省し、1957年から7年間もの長期にわたってタイに暮らした。滞在最初の2年間は外務省留学生としてチュラロンコン大学で学び、東南アジア大陸部を広く旅した。さらに、首都バンコクの名刹で上座仏教僧侶として出家した。石井はその後1963年に帰国し、本省で勤務した後、1965年に京都大学へ出向して研究者としてのキャリアを歩み始めた。石井は、タイの言葉を使いこなし、長い期間生活を共にすることを通じて現地の人々のものの見方を深く理解し、また上座仏教徒社会における僧侶という社会的存在を実体験していた希有な人物であった。

地域研究においてはまた、対象に接近して寄り添うだけでなく、その対象が示す特徴を客観的に捉えるために外部者の視点に立って考える姿勢も大切である。東南アジア研究者としての石井は、ラテン語を始めとした西洋諸語に大学入学前から親しみ、キリスト教にも関心を持っていた（石井 2003: 149）。そして、学生時代には実際に教会に通って洗礼を受けるまでになった。仏教という宗教がタイ社会において果たしている役割を、西洋社会でキリスト教が果たしてきた歴史的な役割を念頭に置きつつ比較の地平で考える視座に石井が立っていたことは、本書の内容を理解するための重要な背景情報である。石井は、初めての単著である本書で、タイを事例に東南アジアの仏教の社会的な位置づけを日本の読者に紹介した。そし

てその後、『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』（1975年、創文社）において、キリスト教との比較の視点をより強く打ち出したタイ仏教社会研究の集大成を発表した。東南アジアの地域研究と宗教社会学の古典として、こちらの著作もぜひ手に取ってほしい。

参考・関連文献

石井米雄. 1969. 『世界の宗教 8 戒律の救い—小乗仏教』 淡交社.

——. 1975. 『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』 創文社.

——. 2003. 『道は、ひらける—タイ研究の五〇年』 めこん.

林行夫（編集協力）. 2011. 『新アジア仏教史 04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』 佼成出版社.

和田理寛ほか. 2021. 『東南アジア上座部仏教への招待』 風響社.

❖本書の著者紹介（石井米雄）

日本における東南アジア研究の代表的研究者。海外渡航が難しかった戦後の状況下で、とにかくタイに行きたいという理由で外務省の役人になり、現地へ向かった。研究者に転じてからはタイの社会と歴史に関する優れた著作を発表するだけでなく、文理融合型の共同研究に基づくタイと東南アジアの研究を京都大学で推進した。その後上智大学や神田外国語大学でも教鞭をとった。

❖執筆者紹介（小林 知）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。戦争や災害、国家などの大きな権力による干渉に翻弄されながら、しぶとく生き抜こうとする人々の姿に興味を抱き、1990年代末にカンボジア農村でフィールドワークを行った。当初はカンボジアの人々の生活を理解するために始めた仏教の研究だが、近年は仏教そのものも調査している。宗教だけでなく、生業活動や食文化を通して人々の生活の変化の意味を考えることにも関心がある。

經濟

末廣昭

『キャッチアップ型工業化論』 ——アジア経済の軌跡と展望』

名古屋大学出版会，2000

キャッチアップ型工業化とは何か

本書はタイの工業化経験を「導きの糸」として使いながら、後発工業国（以下、後発国）の工業化の成否を左右する基本的な要因についての理解を深める作品である。問題意識が明確かつ含意の豊富な本書は、現代の古典と呼べる影響力をアジア研究にもたらし、大泉（2007）、遠藤ほか編（2018）、後藤（2019）、伊藤（2020）など多彩なアジア経済研究を生み出した。また本書は戦後アジアの急速な経済的成功をさまざまなマクロ指標から探ったアジア開発銀行（2021）を工業化のミクロ実態から補完する書でもあり、キャッチアップ期に入って久しい現代アジアの経済社会を理解するための基本書ともいえる。

本書の問いはシンプルだ。後発国が多かったアジア、とくに東南アジア地域で急速な工業化がどのようになされ、工業化がどのように経済発展に

繋がったのかというものだ。これに答えるため、本書は「周辺から世界を見る」とし、日本の工業化経験と過去の政策実践を参照しつつ、タイをはじめ東南アジア諸国の工業化経験を工業発展の世界史に位置づけた。そして工業化推進の要因を追究するため「社会的能力」という分析概念を用意し、それを構成する要因を政策ツール、イデオロギー、担い手、社会制度・組織の四点に整理した。そして本書は「早く追いつけ」というキャッチアップ型の工業化戦略は教育をはじめ社会・政治のあり方と切り離せないことを示す一方で、この開発戦略は急激な社会変化をもたらしやすいことも示した。

本書が考察したキャッチアップ型工業化とは何か。著者によれば、遅れて工業化に乗り出した後発国がとろうとする、そしてとらざるをえない工業化のパターンである。それは先発国からの技術借用に基づく工業化を通じ、技術開発の固定費を節約しながら先発国との所得水準の格差を短期間に縮めようとする後発国の経済開発戦略の現れである。経済のグローバル化と経済自由化政策が進行する中、天然資源ベースの商品輸出、輸入代替型工業化戦略、輸出振興という3種類の工業化戦略をどのように組み合わせるべきかについての試行錯誤でもあり、生産費用削減型の価格競争を選択し注力せざるをえないという性質を宿す。

もう少し具体的に述べよう。先進国からの技術輸入でキャッチアップは可能であるものの、後発国には外貨制約があるため、天然資源または農水産物の輸出で技術輸入を賄うしかなく、そのためにまず輸出振興政策が必要となる。こうしてキャッチアップは技術の輸入から始まり、国内生産の開始・保護、さらに高度な技術の輸入と進むが、背後では貿易政策と産業政策が密接不可分の形で連動する必要がある。つまりキャッチアップ型工業化とは政府の強い関与を要する工業化戦略である。本書は後発国の工業化にあたり輸入技術、適正技術の重要性を論じた速水（2000）の含意を具現化し、政策の強い関与がカギとなることを示した作品ともいえる。

工業化を推し進める社会的能力

キャッチアップ工業化論の本質を理解するために、その主張を車にたとえよう。まず運転手だ。運転手は経済活動の担い手である企業群とする。本書は経営学者ポーターの「国の競争優位論」に依拠しながら、一国の競争力は一国の主要大企業の競争優位に規定されると想定した。工業化の実現装置として設立される公営・国営企業、生産・販売拠点を求めて立地する多国籍企業、財閥化した地場ファミリービジネス企業という異なった来歴と性格をもつ3種類の企業が互いに市場支配力というハンドルをめぐって競争しつつ、鼎構造の一角となりつつ役割分担して協調する場面を本書はたっぷりと描き出す。そこには輸入代替・輸出振興という貿易政策手段に加え、産業政策手段も用いられることを示した。さらに四半世紀前のアジア金融危機を題材とし、キャッチアップが進行する中での短期資本の急激な流入、輸出不振や投資収益率低下、企業統治の「制度的後進性」が後発国の工業化に何を引き起こすかという問題も検討されている。

次に車輪だ。ここでは車輪を技術輸入と製品の輸出の二つとしよう。そして燃料は成長イデオロギーで、車の内部機構にあたるアクセルとブレーキは政策ツールとしよう。最後に車の心臓部エンジンにあたるものは社会制度・組織としよう。車輪と燃料については重要な先行研究がある。技術輸入と輸出については、世界経済は各国が異なる時期に製品の輸入・生産・輸出に順次従事することで異質化と同質化を繰り返すという赤松要の議論やヴァーノンのプロダクトサイクル論に依拠した。また成長イデオロギーが工業化をもたらすと考えたガーシェンクロンの視点を応用し、開発独裁が後発国の急速なキャッチアップ工業化戦略を政治面から支え、指導者はそこに政治的正統性を求めたことを示した。

これら先人たちの系譜に連なる本書は、急速な工業化戦略を支える社会制度・組織の役割というエンジンの徹底的な点検にいよいよ入ってゆく。具体的には外国で開発された技術を借用し、どのように生産現場に定着さ

せ、改善できるかという現場・工場・企業レベルの技術形成・高度化過程が分析される。その際「日本的生産システム」が具体的に点検される。これは、厳格な生産管理のもとで消費者の嗜好の変化や顧客企業の注文に素早く応じるための製造技術である。多品種生産かつ市場環境変化に柔軟に対応しながらも大量生産と品質志向を両立させようとする日本の生産システムの導入と定着のあり方に分析の焦点が絞られる。

それではなぜ、これが急速な工業化を説明するうえで重要なのか。答えはこうだ。先進国からの技術輸入に基づく工業生産能力を生産現場で速やかに発揮させ、質を維持しながら可能な限り安価な費用で生産した製品を輸出に結びつけてゆくためには、製造技術つまり生産管理技術の向上がどうしても必要となる。その時「日本的生産システム」を輸入・導入した国では、生産技術の技能形成に注力することで「後工程」の競争力を築くことができる。このシステムを採用すれば、より難易度の高い製品の性能・機能を作り出す設計開発技術である「前工程」の製品技術の蓄積に至らずとも短期間のうちに工業化が実現するからだ。

他方、輸出先の消費市場の変化に柔軟に対応しつつ、安価な費用で良質な製品を生産し、国際的に価格競争するという行為は、厳格で緻密な生産管理を現場に当然要求するため、労働需要の特徴を変えた。その厳格さは生産管理に留まらず工場内の労務管理、人事と処遇、そして労使関係にも強い影響を与えた。こうした国際競争面からの圧力に加えて、それが故にというべきか、開発主義政治は国の労使関係への直接介入をもたらした。価格競争は効率的かつ柔軟な生産体制の構築を要請する一方で、開発主義政治は抑圧と包摂で労使紛争の芽を摘み、労働運動をコントロールしてきた。

ここまで述べたように価格競争と開発主義の二つの力はエンジン性能の向上をもたらす。しかし、これらの力が人事と処遇面にも加わったことで、教育制度という社会制度の性格すら徐々に変わり、労働供給の特徴が変

わった。なぜか。教育制度自体が生産管理技術の精度を上げて価格競争を忠実に実行できる労働力の選抜・供給機関という性格を強めるようになったからだ。そうした性質は、「前工程」の研究開発が要求される非価格競争面や市場開拓よりも、工場やサプライチェーン内での費用削減を通じ、価格競争面に特化した労働力を供給するのに向いたものであった。

さらに製造業企業の生産技術は労働集約的特性をもつため、雇用吸収能力が高く、貧困削減には繋がるものの、キャッチアップ型工業化を採用した国々では人々間の競争が激化し、教育投資を通じた社会問題が生じやすくなった。このように、本書ではキャッチアップをもたらしした社会的能力とその構築過程には副作用もあると解釈され、一国の教育制度が急速な工業化を支えることを示すとともに、工業化が教育制度の性格をも変える力があることを活写した。本書は急速な工業化が労働にもたらした負の側面を取り上げながら結論になだれ込み、成長イデオロギーがある限りキャッチアップ型工業化モデルは今後も長期間続いてゆく可能性が高いと結論づける。

キャッチアップを超えて——コインの表と裏

最後にキャッチアップ型工業化の成長軌道に乗った国の次の段階について、本書からどういった含意が得られるだろうか。本書が教えるように、後発国が急速な工業化を実現する過程には、それを牽引してきた中核的な利益団体があり、それらを中心にさまざまな政治経済社会システムが変化したはずだ。しかし、その担い手の短期的利益と一国の潜在的な成長戦略がいつまでも一致するとは限らない。なぜならキャッチアップ型に最適化された政治経済社会システムは、価格競争面の推進力が従来の成功要因の基盤であるが故に、研究開発や新市場開拓に基づく非価格競争力を高めるといったキャッチアップ期以降に求められる活動の抵抗力ともなりえ、一国の長期発展を阻害する可能性がある。

経済成長理論によれば、1人当たり所得の成長率は技術進歩の成長率に等しい（齊藤ほか 2016）。つまり技術進歩こそが過去から現在にかけての人間の経済的な豊かさを決める。これと本書の含意が仮に正しければ、キャッチアップに有利だった社会は、その工業化戦略の耐用年数が限界に来た時、社会制度・組織の革新という技術進歩を実現して非価格競争に到達して付加価値を生まなければ、価格競争を強いられる不利な位置に留まらざるをえない。

「良質な製品をどのくらい安価に生産しつつ、顧客に高い付加価値を認識してもらうべく高価格を受け入れてもらうか、企業競争力の源泉は、この競争領域の選択にある」（町北 2019）。本書の出版から 20 年が経過した。この間キャッチアップを果たした日本を含む東アジア、東南アジアの担い手たちが低賃金のみを競争力とせず上手に競争領域を選択できたのか、本書の続編末廣（2014）も参照しながら読者に厳しく評価してもらいたい。

参考・関連文献

- アジア開発銀行．澤田康幸（監訳）．2021．『アジア開発史—政策・市場・技術発展の 50 年を振り返る』勁草書房．
- 遠藤環ほか（編）．2018．『現代アジア経済論—「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣．
- 後藤健太．2019．『アジア経済とは何か—躍進のダイナミズムと日本の活路』（中公新書）中央公論新社．
- 速水佑次郎．2000．『開発経済学—諸国民の貧困と富』（創文社現代経済学選書）創文社．
- 伊藤亜聖．2020．『デジタル化する新興国—先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書）中央公論新社．
- 町北朋洋．2019．「書評 都留康著『製品アーキテクチャと人材マネジメント—中国・韓国との比較からみた日本』」『経済研究』70（1）．
- 大泉啓一郎．2007．『老いてゆくアジア—繁栄の構図が変わるとき』（中公新書）中央公論新社．
- 齊藤誠ほか．2016．『マクロ経済学 新版』有斐閣．
- 末廣昭．2014．『新興アジア経済論—キャッチアップを超えて』岩波書店．

❖本書の著者紹介（末廣昭）

経済学とタイを中心とする東南アジア地域研究を架橋した経済学者である。その仕事の幅広さは日本を代表する社会学者と呼ぶにふさわしく、業績は2018年の第29回福岡アジア文化賞学術研究賞の贈賞理由に詳しい。また末廣の蔵書や調査ノートが末廣昭文庫として東京大学附属図書館アジア研究図書館のU-PARLに付設され、これを解説した「末廣昭文庫について」にも末廣の業績が詳しく記されている。

❖執筆者紹介（町北朋洋）

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門は労働経済学。感銘を受けた本に、宇沢弘文、1974.『自動車の社会的費用』（岩波新書）岩波書店。自動車は「キャッチアップ」の代名詞かもしれませんが、人間の可能性を広げる「フリーダム」の象徴かもしれません。他方自動車事故は日本で減ってきたとはいえ、東南アジアをはじめ新興国・途上国で増えていきます。人間は自動車や都市交通システムとどのように付き合うか、公共性の基盤と個人1人ひとりの自律性の関係を問うことの重要性を本書から学んでいます。

杉原薫

『アジア間貿易の形成と構造』

ミネルヴァ書房, 1996

近代（19世紀～20世紀前半）は欧米諸国の政治経済的影響力が全地球規模で広がり、資本主義を核とする近代世界経済が成立した。この過程で、アジアは西洋列強の植民地化や帝国主義にさらされながら、工業原料供給地域として世界経済に取り込まれていった、というのが従来の見方であった。これに対して本書は、西洋進出が本格化した19世紀後半のアジアでは、欧米との貿易よりも急速にアジア域内の貿易が成長したという実態を明らかにし、その基盤にはアジア独自の国際分業体制の成立や、在来の商人や移民の活発な活動があったことを論じた。そして、近代アジアは西洋経済への従属という一面にとどまらず、アジア間貿易による「相対的自立性」をもった経済システムを形成していたと主張する。

本書の貢献は、アジア経済に関する史実を解明したのみならず、それまで当然視されていた「アジア停滞論」や「従属論」の歴史認識を実証的に

問い直したことにある。本書は1980年代から活性化した「アジア交易圏論」の核をなす成果であり（浜下・川勝編2001）、近年に至るまでアジア経済史の実証研究に刺激を与え続けている。さらにアジアを超えて、「グローバルヒストリー」という歴史研究の新潮流にまで繋がりを持つ。こういった点からも、本書はまさに学問上影響力の強い書物（Seminal Work）であるといえる。

その分析では「東南アジア」をアジア間貿易の一角を占める重要地域として扱っており、東南アジア史・地域研究者にとって重要な論点を提示している。それら論点を東南アジア史の視角からまとめた解説が2003年に発表された（大橋2003）。また、2000年代以降には、「アジア間貿易」の議論に刺激を受けた東南アジア貿易史研究が数多く発表され、著者の杉原も自身の議論を発展させた数多くの論文・書籍を発表している。こうした状況を踏まえ、以下ではその核心的主張を解説するだけでなく、書物刊行後の「アジア間貿易」の研究展開を理解するうえで重要な問題にも触れていく。

「アジア間貿易」の数量的捕捉

本書の核は、貿易統計を用いたアジア間貿易の数量的捕捉による高度な実証性である。それは単に再現可能性という方法論の問題にとどまらず、先行研究の蓄積を発展的に継承し、他の研究者が批判も含めて積極的に反応することを可能とするインタラクティブな性質も含む。本書第1章では、19世紀末以降のアジア域内の貿易成長を実証するべく、主にインド、東南アジア、中国、日本間の貿易を「アジア間貿易」と定義し、それに沿って貿易統計の整理・分析を行っている。

杉原は「アジア間貿易」を、西洋進出に「対するアジアの対応を表現するための一つの概念として」提示し（p.15）、それをを用いて「ある程度の経済的自立性をもって生じた地域間の貿易の規模を検出すること」を目的と

している (p.18)。この背景には、西洋中心史観への挑戦や、西洋経済史との対話という姿勢がある。産業革命後の西洋の経済発展については分厚い研究蓄積があり、例えば、その繁栄の原動力は西欧域内貿易にあったという西洋中心史観の議論と、西欧と植民地との貿易を重視する世界システム論との間の論争があった (松井 1991)。また、杉原は「あとがき」に、アジア間貿易の構想は、ソウル (S. B. Saul) のイギリス多角的決済の研究に影響を受けたと述べている。

これら卓越した先行研究の基礎には、数量的に捕捉された大規模な西欧域内貿易という共有知識があった (例えば Bairoch 1974)。杉原が目指したのは、単にアジア域内のあらゆる貿易をまとめることなく、欧米とアジアとの遠隔地貿易や西欧域内貿易と対照可能なレベルで分類・整理された「アジア間貿易」の実態を確立することであった。そのために、恣意的であっても経済的に意味のある地域単位をアジア域内に設定する必要があった。そして、その厳密な数量化があって初めて、既存の議論、すなわち西洋中心史観への挑戦権を得たといえる。こうした目的論的な定義に基づく「アジア間貿易」の数量的把握や議論に細かな批判を加えることは容易であるが、実際には、むしろその「隙」を新たな論点として、刺激的な論争が生み出されてきた (例えば、加納 1995 や堀編 2009)。杉原自身も、さらに西洋中心の世界貿易史の修正を目指して、「アジア間貿易」の定義や対象時期を拡張させた挑戦的な議論を展開している (杉原 2020: 第 7 章)。

アジア域内国際分業

近代のアジア間貿易の成長は、アジア域内で形成された国際分業体制を基盤とした。その一つの軸がアジアの工業化であった。19 世紀前半以来、西欧工業品の消費市場となっていたアジアであったが、19 世紀後半になると、機械製造を導入したインドの綿紡績業や日本の綿布産業が発展し始めた。そこで焦点が当てられたのが、アジア固有の生産と消費の強い繋が

りであった。

例えば、アジア在来の棉花は太糸・厚地布の生産に適しており、西欧機械が最適化した細糸・薄地布とは技術体系が異なっていた。とくに日本の綿産業は太糸・厚地布の生産に特化した機械技術を発達させ、粗野な厚地綿布を好むアジアの消費者の需要を満たした。その結果、インド・中国から日本への棉花（後に綿糸）の輸出、それを原料として製造された日本綿布のアジア各地への輸出という、工業化型貿易が確立した。加えて、欧米諸国が資本集約的な重工業に比重を移す中で、労働力が豊富なアジアでは労働集約的な軽工業生産が比較優位を持った。さらに杉原の近年の研究では、非西欧世界の中で初めて機械工業化を達成したアジア、とくに日本と中国では、近世以来、豊富な労働力を生産に生かす制度や技術が発達しており、それが労働集約型工業化というアジア特有の発展経路に繋がったという新たな議論も展開している（Austin and Sugihara 2013; 杉原 2020: 第2章）。

東南アジアに深く関わるもう一つの国際分業が、一次産品輸出と需要連関効果であった。19世紀後半以降、植民地化の中でインドと東南アジアでは欧米向けの工業原料の輸出が急速に拡大した。インドでは多くの農民が自給栽培から商品作物栽培へ転換し、また東南アジアでは一次産品生産に必要な労働力の需要が高まり、中国やインドからの出稼ぎ労働者の大規模な流入が起こった。その結果、一次産品輸出の成長に伴って、その生産者たちの消費財需要も急速に拡大した。その需要を満たしたのは、欧米の工業品だけでなく、アジア産の衣類（日本綿布）、食料（米、魚、砂糖）、嗜好品（アヘンや雑貨類）であった。すなわち、欧米工業国の原料需要の拡大に反応して、アジアでは労働力の転換や移動が起こり、それが地域内に消費財への新たな需要を引き起こすという需要連関効果により、アジア間貿易は成長した。

工業化ベースの世界経済成長という文脈では、一次産品輸出に特化した東南アジアは、西洋経済だけでなくアジア経済においても「二層の周辺部

化」に陥ったとされる（第3章）。ただ、一次産品輸出経済の発展は、現地民や移民に所得向上の機会をもたらした可能性もあった。さらに近年の杉原の研究では、東南アジアは19世紀前半から、貿易自由化や中継港の発達を介して多様な地域産品を流通させるという、より自生的な貿易発展を見せたことを指摘し、一次産品輸出経済の理解においては、周辺部化というネガティブな評価は後退したといえる（杉原 2020: 第6章; Sugihara and Kawamura 2013）。

歴史認識の転換—断絶・連続・再編

従来の経済史では、19世紀のアジアでは西洋進出により近世の経済体制は解体され、新たな秩序の下、世界経済に統合されたという「断絶」の面が強調された。本書が目指したのは、それら「西洋中心史観」や「アジア停滞論」が提示する「断絶」を相対化することであった。つまり、西洋進出の影響を否定するというよりは、それに対するアジアの主体的・積極的反応を示すことで、「再編」を強調した。

他方、杉原と共に「アジア交易圏論」を主導した、中国・華僑史の浜下武志、日本史の川勝平太の議論は、アジア経済の主体性や自立性に焦点を絞り、西洋進出の影響を過小評価することで「連続」面を強く打ち出した（古田 2000: 補論）。歴史認識の問題を解決するという意義に照らせば、アジアの自立的発展を主張する「連続」説はインパクトがあったが、歴史の実態という研究の本質に沿えば、西洋の影響は無視しうるものではなく、その後の研究の発展をみても「再編」論に一日の長があったといえる。しかし、「再編」論にしても、その分析は西洋進出の全盛期であった19世紀後半以降に限られたため、近代アジアの「相対的自立性」を有する経済発展は、結局のところ西洋進出を前提としたという点で、西欧経済の拡大から生じた副次的な発展に過ぎないとも捉えられた。

この限界を乗り越えるべく、近年の杉原を中心としたアジア貿易史研究

は、18世紀末からアジア間貿易が成長していたことを数量的に示すとともに、アジア間貿易の定義もよりローカルな取引を取り込んだり、アジア人商人の活動を重視して中継貿易を積極的に加えたりという発展を見せている（籠谷・脇村 2009）。「長期の19世紀」に注目する新たな議論では、近代アジアの経済発展は、西洋主導の世界経済拡大に対する受動的な反応という「再編」だけでなく、アジアの側から世界経済の成長に影響を与えた「相互作用」の側面もあったことが示されつつある。地域固有の経済発展と、その相互連関から世界経済の誕生を捉えることを目指す「グローバルヒストリー」の潮流とも相まって、「アジア間貿易」の研究はさらなる発展が期待される（杉原 2020）。

参考・関連文献

- 古田和子. 2000. 『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会.
- 浜下武志・川勝平太（編）. 2001. 『アジア交易圏と日本工業化—1500-1900（新版）』藤原書店.
- 堀和生（編）. 2009. 『東アジア資本主義史論1 形成・構造・展開』ミネルヴァ書房.
- 籠谷直人・脇村孝平（編）. 2009. 『帝国とアジアネットワーク—長期の19世紀』世界思想社.
- 加納啓良. 1995. 「国際貿易から見た20世紀の東南アジア植民地経済」『歴史評論』539.
- 松井透. 1991. 『世界市場の形成』岩波書店.
- 大橋厚子. 2003. 「日本におけるアジア交易圏論」『岩波講座 東南アジア史 別巻—東南アジア史研究案内』早瀬晋三・桃木至朗（編）. 岩波書店.
- 杉原薫. 2020. 『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会.
- Austin, Gareth, and Sugihara, Kaoru eds. 2013. *Labour-Intensive Industrialization in Global History*. London: Routledge.
- Bairoch, Paul. 1974. “Geographical Structure and Trade Balance of European Foreign Trade from 1800 to 1970.” *Journal of European Economic History*. 3(1): 557-608.
- [Sugihara, Kaoru and Kawamura, Tomotaka. 2013. “Introduction: Reconstructing Intra-Southeast Asian Trade, c. 1780-1870: Evidence of Regional Integration under the Regime of Colonial Free Trade.” *Southeast Asian Studies*. 2\(3\), Special Focus.](#)

❖本書の著者紹介（杉原薫）

アジア経済史を専門とし、ロンドン大学 SOAS（東洋アフリカ研究学院）歴史学部シニア・レクチャーラー、大阪大学経済学部教授、京都大学東南アジア研究所教授、東京大学大学院経済学研究科教授、などを歴任し、現在、総合地球環境学研究所特任教授。主著に本書や『世界史のなかの東アジアの奇跡』などがある。

❖執筆者紹介（小林篤史）

京都大学東南アジア地域研究研究所助教。アジア経済史、とくに近代貿易史を専門とする。

速水佑次郎

『開発経済学』

——諸国民の貧困と富』

創文社（創文社現代経済学選書），2000

「緑の革命」の衝撃

読者の皆さんは「緑の革命」を耳にしたことがあるだろうか。20世紀半ばから後半にかけて穀物の生産性向上を目指した品種改良・開発を中心とし、そこに灌漑、化学肥料、農業機械を組み合わせた農業の近代化のことで、農業革命の一つとされる。最新の研究（Gollin et al. 2021）によれば、穀物の高収量品種は1965年から2010年の間に穀物収量を4割強増加させたと推計される。この推計値に基づけば、仮に高収量品種の登場が10年遅れたとすると、人口当たり国内総生産が2割弱小さくなり、約2億人が低開発状態に置かれたと推定される。その遅れは、現在の世界全体の国内総生産1年分に匹敵する約8500兆円という途方もない損失を今日までもたらしたはずだと推定されている。「緑の革命」は世界全体の所得向上と人口成長率の低下をもたらし貧困削減に有益だったとってよい。

本書著者の速水佑次郎の業績は、イネの高収量品種の開発に成功した「緑の革命」推進機関として名高いフィリピン国際稲研究所（IRRI）を起点とする農村調査に基づく。農業生産性の急上昇をもたらした「緑の革命」をリアルタイムで経験した速水は、経済発展にとって品種改良・新品種開発という科学的知識が重要であることを指摘し、その知識を圃場に供給するためには市場経済システムが発達している必要があること、そしてその知識活用の成否には社会制度・組織的条件が関わっていることを指摘した。つまり、ヒトが作る取引ルールと人間関係が決定的に重要であることを指摘し続けた。

経済発展における共同体の役割への注目

「緑の革命」を経験した速水の研究は、市場と国家の役割に重きを置いたそれまでの経済開発分析に対し、新たに共同体の役割を取り入れることに繋がってゆく。再び高収量品種を例にとると、これを活かすには大規模灌漑設備が必要となる。しかしこうした公共財が市場を通じては供給されない時、国家や共同体がこうした市場の失敗を補い、とくに共同体の力が経済発展に直結することを示してきた。

同時に速水は適正技術という概念の精緻化に取り組み、これを経済開発分析に取り入れた。それは先進国で開発された科学的知識を開発途上国が借用して自国の技術革新に活かすには、自国の環境・要素賦存条件に適合するかが決定的に重要というものである。これに基づき、速水は技術革新の方向性についての予測を与える「誘発的技術革新の理論」を構築し、技術革新というものは要素賦存状況に依存するとした。つまり、ある場所で不足し、相対価格が高い生産資源の投入を節約する方向に促されると予測した。さらに速水は社会制度も一種の生産技術であると喝破し「誘発的制度改革の理論」を展開した。そこでは天然資源の不足に伴って、天然資源管理に関わる社会制度そのものの確立が進むという予測も提示した。

このように技術と制度に関し速水が研究してきた「誘発的革新の理論」は、速水のもう一つの切り口である土着の共同体の役割と結びつけられ、極めて強力な論理を提供した。速水によれば、各経済が自らの生産資源不足を補うための技術・制度革新の方策はさまざまありうる。つまり土地、労働、資本といった生産要素の賦存状況次第でさまざまな技術・制度革新のパターンがありえて、それが技術や社会制度の変化の方向性を決める。経済発展過程における技術や社会制度変化の方向や速度に影響を与えるのが、土地、労働、資本を一つに結びつける機能をもちつつ社会に再配分する共同体という土着の組織だという論理である。

こうして「誘発的革新の理論」と共同体の役割を統合し、ヒトが作るルールと人間関係のあり方が経済発展の方向性を左右するという論理に貫かれた本書は、経済開発に関する新しい視点を提示した。フィリピンを中心に長きに渡る農村調査を通じ、経済発展における共同体の役割に関する理論構築を進めた速水の業績は、実務への影響力も大きく、第一級の社会科学者であり続けた。

貧困と資源制約に焦点を当てた新しい国富論

本書初版は1995年に発表され、新版が2000年に公刊された。新版には初版後1997年に起きたアジア金融危機についての分析が追加され、日本も含めた東アジア型のキャッチアップ戦略である国家主導型開発の有効性と限界について率直な評価が加えられ、本ブックガイドにも含まれている末廣(2000)とも補完的な内容である。また高収量品種の普及に伴い、農業生産性上昇ペースが鈍化していることについても率直な評価と分析が追加され、新版は価値ある大幅改訂となった。

本書のタイトルである開発経済学とは何か。それは国や地域ごとにみられる経済発展の違いを観察し、その違いをもたらす要因を経済学的に理解することを通じて、貧困削減と富の蓄積に寄与し、人間の可能性を上げよ

うとする学問である。経済学的に理解するという意味には二つあり、一つは人間の誘因や動機（インセンティブ）を正面から扱うこと。これは金銭的であれ非金銭的であれ、人間の本性に合致しない制度・政策設計は持続可能でないという事実を認識しようという姿勢だ。もう一つは価格や情報、制度を介した集団間の相互依存関係を正面から扱うこと。とくに遠く離れた異なる集団が市場を介して結びついているという事実を認識しようという姿勢だ。エスワランとコトワル（2000）がいうように、それを踏まえて初めて、市場制度ができること、できないこと、そして政府の役割を評価しうる。これら人間の誘引・動機と相互依存関係を織り込んだ本書は、われわれの経験、直観を補い観察力や想像力を強化する「めがね」ともいえる。

本書の副題は「諸国民の貧困と富」である。貧困に焦点を当てた新しい国富論である本書を一言で表すと、経済開発にあたっていかなる経済体制（社会システム）を選択すべきかという観点から、近代経済成長の要因と帰結を考察した作品である。前述したとおり、各々の要素賦存条件に適した形で他国の知識・技術をどう借用・受容し、自国の技術革新に結びつけ、制度・組織革新に結びつけるかを問う作品である。

その際著者は資源や技術からなる経済サブシステムと、価値観やルールからなる文化・制度サブシステムの二つが経済体制（社会システム）を構成すると想定した。経済サブシステムの一角をなす資源は、生産物を生み出す生産要素でありながら、われわれの価値観やルールの基盤でもあると考える。そしてこれら経済変数と非経済変数からなる2種類のサブシステムが相互依存的に変化することで社会が変化すると考え、この社会変化を経済発展と呼んだ。この速水の見方はグライフ（2021）にも近い。

本書はこうした社会観を軸に、初期工業化と近代経済成長を対比させる。この二種類の経済成長を各々どのように説明できるかに焦点を絞り、経済規模の拡大の本質に迫ってゆく。そこでは「資源制約を打破するには」と

いう具体的な切り口が用意される。経済成長は土地・資本・労働といった生産資源の投入によって可能であるが、そうした資源投入の効果は徐々に減る。こうした経路での経済成長は製造業で実現されやすく、初期工業化と呼ばれるが、時間の経過とともに経済成長率は生産資源投入の伸び率よりも低下する。さらに資源投入そのものが成長の唯一の源泉であるため、資源制約を克服できない。対して近代経済成長は、生産資源の投入による経済成長ではなく、技術革新によって資源投入あたりの産出を増やそうという試みが実現したものである。こうして本書は近代経済成長を、資源制約を克服して貧困削減を実現する道として評価する。

それではこの近代経済成長に基づく経済発展を支える経済体制とは何で、それはどうあるべきか。経済体制とは経済活動を行うアクター間の利害調整を担う制度的枠組みを指しており、具体的には市場という組織でもあるし、国家や共同体という組織でもあった。先の大きな問いに対し本書は「誘発的革新の理論」を応用しながら、市場、国家、共同体など開発を支える社会的、政治的基礎でもある組織を組み合わせながら資源制約を克服して近代経済成長を実現する方法は複数ありうるという答えを出す。つまり、相対的に市場という組織が作ってゆく機能の効率性が高い国では、市場の力を活かすべきで、共同体という組織がもたらす調整機能がより効率的な国は、その共同体の力を活かすべきとなる。実際に近代経済成長を実現した国々をみると、それら三つの組織の組み合わせのあり方は一つに収斂しているとはいえない。つまり近代経済成長という山への登り方は複数あるし、各国固有の伝統的な文化や「経路依存性」の強い制度のもと組織という道具間の相互調整のあり方もさまざまなのだ。

2020年代の読者へ——環境破壊なき経済発展は可能か

本書初版の刊行から4半世紀が経った。長く読み継がれた本書であるが、2020年代の読者にとって、どのような新しい読み方ができるだろうか。

筆者は本書を杉原（2020）とともに「自然環境破壊なき経済発展は可能か」という人類共通課題を読者が考えるための指針として強く推薦する。本書の基本的な論理と第7章を組み合わせれば、要素賦存の多い天然資源や自然環境は安価であるため、費用削減の機会を窺う企業家にとっては、こうした安価な生産要素を多く使用する資源収奪型技術を導入して、高価な生産要素の投入を節約することが魅力的になる。制度や組織もそうした安価な資源収奪型の生産技術に対応したものになりやすい。

しかしながら自然環境は経済サブシステムの一部であると同時に、文化・制度サブシステムを支えている根本的な生産資源である。環境資源に恵まれているからといっても無軌道な環境破壊は経済発展を支える二つのサブシステムも破壊することを本書の分析は示唆し、天然資源略奪・収奪型の工業化には限界があることをわれわれに静かに教える。一方、斎藤（2014）が詳しく述べるように、自然改変が人間社会に与える影響には単純な負の影響から、負の影響を最小限に留める保全まで複数の作用がある。また保全の背後にも利潤追求から集団内の利害調整までさまざまな積み重ねがあったことを環境史の研究は明らかにしてきた。このように人間には市場、国家、共同体という組織を使って、資源利用と保全を両立させる制度構築能力がある。そうした制度と組織は今世紀の経済発展をどのように支えるのだろうか。速水が強調してきたように、制度と組織を研究することの重要性は永く失われない。

参考・関連文献

- アブナー・グライフ、岡崎哲二・神取道宏（監訳）、2021、『比較歴史制度分析（上・下）』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。（原著：Avner Greif. 2006. *Institutions and the Path to the Modern Economy: Lessons from Medieval Trade*. New York: Cambridge University Press.）
- ムケシュ・エスワラン、アショク・コトワル、永谷敬三（訳）、2000、『なぜ貧困はなくなるのか—開発経済学入門』日本評論社。（原著：Mukesh Eswaran and Ashok Kotwal. 1994. *Why Poverty Persists in India: A Framework for Understanding the Indian*

Economy. Oxford University Press.)

斎藤修. 2014. 『環境の経済史—森林・市場・国家』岩波書店.

末廣昭. 2000. 『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望』名古屋大学出版会.

杉原薫. 2020. 『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会.

Gollin, Douglas et al. 2021. Two Blades of Grass: The Impact of the Green Revolution. *Journal of Political Economy*. 129(8): 2344-2384.

❖本書の著者紹介（速水佑次郎）

農業経済学，開発経済学といった分野に留まらず，日本を代表する経済学者。業績は2001年（第12回）福岡アジア文化賞学術研究賞の贈賞理由に詳しいが，その業績を貫く核を一言でまとめると，経済発展における共同体の役割とは何で，市場と国家それぞれの失敗を補う共同体とはどのようなものか，そして共同体の失敗を乗り越える策は何かという根源的な疑問を追究し続けたことにある。

❖執筆者紹介（町北朋洋）

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門は労働経済学。感銘を受けた本に，ダグラス・アダムス，マーク・カーワディン。安原和見（訳）。2011. 『これが見納め—絶滅危惧の生きものたち，最後の光景』みすず書房（原著：Douglas Adams and Mark Carwardine. 1990. *Last Chance to See*. New York: Ballantine Books）。研究に限らず，時を忘れて集中することが好きです。

编者紹介

中西嘉宏 (なかにし よしひろ)

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授

専門：地域研究，比較政治学，ミャンマー政治研究

片岡 樹 (かたおか たつき)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

専門：東南アジア研究，文化人類学

CSEASブックガイド

初学者のための東南アジア研究



2022年3月15日発行

编者：中西嘉宏・片岡 樹

企画・発行：京都大学東南アジア地域研究研究所

編集協力・組版：桃夭舎

表紙・奥付デザイン：川島淳子

©2022 Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University



ISBN:978-4-906332-52-6



CSEASブックガイド

初学者のための
東南アジア研究